

538

200



始





26. 9. 5



1801  
④



幕末  
哀史

亂

闘

の

巷

伊藤  
鐵世著

大正  
14. 6. 13  
交





乱闘の巷



538-200

目

次



明 <small>めい</small>	覆 <small>く</small>	恨 <small>うらみ</small>	戀 <small>こひ</small>	最 <small>さい</small>	半 <small>はん</small>
珠 <small>たま</small>	面 <small>めん</small>	の	の	後 <small>ご</small>	鐘 <small>しょう</small>
を	の	一	十	の	亂 <small>らん</small>
碎 <small>くだ</small>	刺 <small>せき</small>	刀 <small>たう</small>	郎 <small>らう</small>	龍 <small>りゆう</small>	打 <small>だ</small>
く	客 <small>かく</small>	太	太	馬 <small>ま</small>	打
.....	.....	.....	.....	.....	.....
二六二	二四	二七	一八八	一七一	一四四

志 <small>し</small>	氣 <small>き</small>	鴨 <small>かも</small>	戀 <small>こひ</small>	朱 <small>しゆ</small>	晚 <small>ばん</small>
士 <small>し</small>	早 <small>はや</small>	川 <small>がは</small>	の	房 <small>ぼう</small>	秋 <small>あき</small>
の	の	の	の	の	の
助 <small>すけ</small>	寅 <small>とら</small>	争 <small>まさ</small>	渦 <small>うず</small>	十 <small>じゅう</small>	鮮 <small>せん</small>
太	松 <small>まつ</small>	鬪 <small>たう</small>	卷 <small>まき</small>	手 <small>て</small>	血 <small>けつ</small>
刀	.....	.....	.....	.....	.....
.....	.....	.....	.....	.....	.....
三三	九三	五	三一	一六	一



# 哀幕末亂闘の巷

伊藤鐵世著

## 晩秋の鮮血

木枯を吹く風も蕭條として物淋しい秋の夕暮、晴れた晝間の天気も、いつやら曇つて、雲行きも荒く、さつと降つては晴れる驟雨といふ奴だ。

ざッと降つて来た雨に、薩摩の家老島津豊後は、馬を早めて、たつくと、だら坂を、狩獵の供、ざつと三十人、急いで来たのである。

「お、降つて来よつた、秋の空、降るとも見え降りとなる、困つたのう」

「いかさま、御家老の仰せのとほり、下世話にも、變りやすいは、女の心と秋の空とか申しますが、秋の空癖でござりまするわ」

口 繪……………(原色版)

挿繪の一……………(寫真版)……………六四頁

挿繪の二……………(寫真版)……………一四四頁

挿繪の三……………(寫真版)……………一八四頁

挿繪の四……………(寫真版)……………二四〇頁

―(挿繪目次終)―



「はッくくく、女の心か、はッくくく、伊集院氏、男の心はどうぢやな」

「はッくくく、これは御家老、とんだところへ横槍を頂戴におよびましたな、とんと、保証のかぎりにあらずとでも申しましたやうかな」

「保証か、はッくくく、それ、あの奇麗なやつめが、はッくくく、よい保証に出やうぞ」

「む、ッ、はッくくく、これは早や恐れ入つた、御家老、お由良の方は」

「叱ッ、聲がたかいわ、はッくくく、女は可愛いものぢやわ、はッくくく」

「はッくくく」

馬上の二人は、妙に甘つたれた、蔭暗いところのありさうな話しをやりながら、馬の足搔きを早めて進んだ。

伴の徒士連中、狩場の獵も面白いが、會憎と、獵の手柄のないやから、あたら中原に鹿を追ひ失せたやうなところへ、かへり路に雨、獲物にや振られ、雨にや降られ。

「おい御同役、どうだ、貴公、今日の手柄は」

「うふ、身共か、いやはや、音はすれども姿は見えぬ、ほんにお前は屁のやうな、狩の臭ひをかいだばかりだ」

「な、なるほど、屁なこといはつしやるわい、身共も御同様、いやはや、大不獵でござつたわ」

「おいく、貴公達、馬鹿に景氣が悪るいぢやないか」

「うんにや、さういふ貴公は」

「はゞかりながら、種子ヶ島得手の守、定めた狙ひに外れがあらうか」

「なるほどなア、猿公なら、無理もないよ、どうだ、百姓やの籬の柿の木、熟した美味さうな奴もうんとあつた、獲があつたら分けたがいゝぞ」

「なんだ貴様、身共を猿公にしよつたのか」

「さうぢやないのかい、身共はまた、貴公、得手の守といふから、うかと猿公と思ひをつたわ」

「けしからぬく」



『わつはつ〜』伴の連中、わけもなくどつと笑つた。

島津豊後が、だら〜坂を下りきつて松並木、小暗いところへ入つたとき、もう、あたりはじめ〜と夕闇が煙のやうに立ち罩て、林のなかは物の影さへわからなかつた

と、突然、松の木蔭から、

『えいッ』と一聲、引き絞つた矢聲。

豊後は、はつとして屹と聲のする方を見かへつた、すると間一髪、流星一個、ぴかりと光る、長形五寸、飛んで豊後の面上目蒐けて飛んで來たのである。

『あッ』豊後は危く顔をひねつた。

『曲者ッ』

『それ曲者だ』供方の連中、どつと驚いて駆けつけやうとするとき、一團の黒い影が毬のやうに飛び出した。

『えいやッ』といふ氣合と共に豊後の乗つてゐる馬の脚をさつくとばかり切放つた。

『ひ〜ん』と一聲、悲しく嘶いた馬は、ばたりのめつた、主は、どたり地上へ。

曲者は得たりと駆け寄らうとしたが、もう供の連中がどつと喚いて斬りかゝつた。

『曲者逃すな』伊集院は、ぱつと馬から飛び降ると、刀の柄に手を掛けながら、かういつて號令した、供の侍達は、さすがに薩摩隼人、矢聲激しく斬りかゝつた。

『え〜ッ、邪魔すな』曲者は、よほど手練の武士と見えて、ぱつた〜と切りたほす見る〜五六人は斬られたやうす。

『手剛いぞ油断すな』供の侍達は、一向に切りかゝる、が曲者は、怯るむやうすもない、暴れる猛虎のやうに、怒りの聲、林の木々へこだまして、カチリカン〜と打ち合ふ劍のひびきも物凄。

悲鳴。

倒れる音。

ばた〜と遠のく氣配。

供の侍達は、稀代の曲者のはたらきに、幾人かを切り倒されて、どつと開い



遠巻きに用心深く、真面目に攻めつけるのであつた、さすがに薩摩隼人も命を捨てたくはないのである。

伊集院は、この體を見ると、かつと怒つた。

「えいッ、いひ甲斐のないものどもだ」

かういつて、ぱらり、一刀を引き抜くと、つゝと進み出た。

「おのれ、汝、なにものなれば狼籍するぞ、御家老、島津豊後殿狩の一行を心得ぬか去ればよし、去らぬと伊集院が刀の鏝としてくれる」

「いふな伊集院、その豊後こそ、我等の仇敵、狩場のかへりをよいしほに、待ち受けたるわ、退け、御家を狙ふ悪魔め、逸見十郎太が討ちとつてくれるのだ」

「なにッ、逸見、うふ、さてはたわけめ、お由良の方へ狼籍して、身から出た鏝、痛い腹を切らせられた汝が父、まこと、大白痴でありよつたが、おのれ父の非分がわからぬとは、父にもましたうつけものめが、豊後殿を討ちとらうなぞとは、大それた奴、さア、參れ」

「お、いふな、豊後一味の悪人め、お家のため、島津の忠臣逸見が誅伐してくれる」

「なにをッ」伊集院も、さすが剛のもの、火花を散らして、挑み合つた。

切り合ふなかにも伊集院は、一味の頭領、豊後を氣づかつた。

「豊後どの、御退散あれ、かまわずに」と、叫んだ。

「お、」豊後はひらり伊集院の乗馬に飛び乗ると、ばつと手綱を引いて、一目散、

つゝと駈け出した。

「おのれ豊後、逃げるな、姦物まで」

十郎太は、氣を焦つて、刀を引くと追ひかけやうとする、と、伊集院は得たりと隙を突け入つて、はつしと切りつけた、心得たりと、バチン十郎太は受けとめた。

「えいッ残念、豊後を取り逃がしたか、もうこのうへは破れかぶれ、片つ端から死人の山、腰拔ども、覺悟しやがれ」

十郎太は怒に燃えた切先するどく、斬りかゝつた、伊集院もたじ〜〜。

「ものどもかゝれ」伊集院も、とう〜手にあまつて、供侍達に助勢を求めた。



『それッ』侍達は、またも四方八方から、えいおうと切りかゝつた。

逸見十郎太はもう死にもの狂ひの必死の劔、當るを幸ひと切り立て、薙ぎたてる、大刀のうなりは秋の木枯吹く風のそれにも似て、閃電のやうに劔映が闇にきらめく、バサリ、サツ、朽葉の風に舞ふやうに、ばらりと飛ぶ首、どたりと倒れるもの、ばたばたともがくもの、秋の松林に、夜目に見えねど、思ひも儲けぬ立田川、紅葉と散る血潮のしぶきに、あたりは血のりに、足のすべるがごときありさまである。

斬れど倒せど、薩摩武士、悪人一味といふもの、さすが逃げ出すものもない、みなが必死、必死の劔の打ち合ひ、十郎太は進みつ退きつ、駆けつ潜みつ、千變萬化のはたらき、もはや二十人ほどは切り倒した、伊集院も、こりやとても危いと見たので『退け』と一聲、ばらりと、眞つ先きに逃げ出した、供の面々、かうなつたら、もう逃げるが勝、我先きにと逃げ出す。

『えいッ、卑怯ものめ、逃げるな、かへせ』

十郎太は三尺の大刀提げて、追ひかける、が、かへしては危い、供侍は後をも見

ずに一目散、さすがの十郎太も、もう大勢の相手に必死の奮戦、たとへ鐵壁の身にも少しはつかれがある、逃げ足のはやい供侍には、追ひつけさうもない、また、そんな木つ葉侍を、追ひ討ちしたればとて、なにほどかの手柄にもなるまい、殺した悪人一味は、ざつと二十人、頭目豊後を取りにがしたは、千秋の恨事のやうでもあるが、まづは腹癒せにはなる。

『悪運つよき豊後めを、討ちもらしてしまつたは残念だが、まア、よいわ、二十人の片割れめら、かう打ち討つたは、せめても心地よいことだ、なにはしかれ、このまゝ、歸宅もなるまい、姦物豊後、もう、十郎太と知るからには手配は充分にまはつてゐやう、こりや迂濶には歸れぬわい、はて、なにはとにかく、鍛冶屋町、西郷殿のところまで、さうだ』

十郎太はきつと決心を極めて、血刀を振つて、血のりを拭ふと、ぱちり鞘へをさめて右へ斜、ばつたくと立ち去つた。



鹿兒島は鍛冶屋町、邸といへど西郷吉兵衛、足輕の三びんやしき、狭くるしい一構へである。

當時、齋彬公の岩崎谷の狩競に、小姓の有馬佐七郎が思はぬ危難、荒くれ武士達に狼籍され、あなやと思ふとき、びよつこり現はれた、大兵肥満の丈夫、忽ち、武士たちを礫投げ、

「怪我はごわせんでなによりぢや」

と、のんきな顔をして笑つた男、それは、吉兵衛の一子吉之助、天晴豪傑と見てとつた齋彬公の炯眼、すぐと抜擢されて、庭番に取り立てられた、庭番といへば、どうやら三文の値打ちもないやうに聞えるけれども、いはゞ殿の身邊を護る近衛兵、容易ならぬ大事な役目なのである。

十郎太の訪ふたのは、その吉之助に會ふためであつた。

吉之助は、とりわけて、いひたてる程のずば抜けた器量も見えない、が、どこか人を魅する力がある、それがなんであるか知れない、どこか豪いところがある、どこだ

かわからない、わからない豪さが、朋輩若侍達を支配する、頼りになる男、それがこの吉之助の力であつた、いかな大事にも動せぬ男、しいていへば、かれの武勇、だが、かれは武勇の力は、たつた一度出したばかりである、てうど、そのときは獅子の一撃、あとはノツソリとした眠れる獅子、そのノツソリとした力こそ、吉之助の、人物の底から出る、大丈夫の力なのであつた。

それも道理である、この吉之助こそ、後年の大西郷、幕末維新へかけての大英雄であつたのだ。

短檠の灯火もほの暗い一間、明り窓の破れ障子にうつるかげ、でつぷりと肥つた影が、どつしりと落ちついてゐる。

吉之助はいつも夜深くまで、讀書をするのがつねであつた。

王陽明の知行合一の哲理、心的工夫の一事、伊藤茂右衛門先生の講義を考へて、研磨鍛練をしてゐるのである。吉之助は、一心不亂に、陽明學に凝つてゐる。

と、とん／＼と、戸を叩く音がする、このごろは吉之助の出世で、いくぶん豊には



なつたものゝ、まだ貧乏士族の西郷家、下婢とてもない。

とんく〜。

吉之助は、ふと気づいた。

「ふむ、この夜陰になにものだらう」またも、とんく〜。

「おゝ」吉之助は、やおら立つた、表戸際。

「誰れぢや」

「おれぢや」

「誰れぢや」

「逸見ぢや」

「十郎太か」

「左様」

「なにか用かな」

「火急ぢや、開けてくだされ」

「おゝ」吉之助は、がらり戸を開けた。

異様の姿で、十郎太は、なにやら落ちつかずに立つてゐる。

「まア入れ、どうしたのぢや」

「……………」

吉之助はじつと十郎太の顔を見て獨りうなづいた、なにか大事をやつたなと、一目で感づいたのである、さきにたつて、書齋といふも名ばかり、玄關側の三疊間、形ばかりの庭がある、そこへ無言のまま入つた、十郎太も黙つてノツコリとつゝいた。

坐つても、暫しは無言、やがて、吉之助。

「逸見、やつたな」

「左様」

「首尾は」

「逃がした」

「うむ」



『雜輩二十人ばかり』

『……………』

『立ち退くつもりだ』

『うむ』

『これから』

『そうか』

『京都へ』

『うむ』

『どうだ』

『よか』

『そうか』

『知るべは』

『ないぢや』

『どうする』

『どうにかする』

『うむ』

愛憎のないこと夥しい、これがわかれの二人の應對の言葉とは、とんとがてんがまるらぬのである、が、餘計な無駄口を利くまでもない、ことは、もうきまつてゐるのである、豊後を襲つた、家老の權威を侵したのぢや、立ち退くのはあたりまへである、逸見は、すべくしてした、なにも餘計なことをいふまでもない、巨魁を逸した、それも運だ、なんといつたつて、結局なんともならぬのである。

『おいどんの知つちよる、坂本、龍馬といふのぢや、一度、藤田先生の許で會つた、肝が面白い、尋ねて見られい』

『忝じけなうござる』吉之助は、さら／＼と書を認めて十郎太にわたした。

『さらばぢや、吉之助どの』

『健固にのう』



「御邊も」

「待たれい」

「……………」

「御邊も知らう、天下の轉機、殿の御意、な、勤王が専一ぢや、京都は多事、勤王佐幕と、鎬を削ぐる血の巷ぢや、心得て行かれい」

「服膺いたすでござる」

「さらば」

「さらば」十郎太はすつと闇に消て行く、吉之助は、いつまでも門口に立つて、十郎太の行手を見送つてゐた。

### 朱房の十手

無風流の蠻骨武士、人目をさける目關笠、強刀を横へて、ノツシリくと來かゝつたは、京も遠からぬ伏見のほとりであつた、淀の川瀬のせゝらぎは、都の風をそよと

はらむで、なんとなら田舎武士にも、また變つた心地をもたらすのであつた。

名にしおう伏見のわたし、客待ちの茶屋もかざく、思ひくの客の色どり、川原から吹きなぶる風が、柳の枝を靡かせて、さつとほる酔ひの面を打つ、こゝ、掛茶屋の低酌は、プロ黨にはまこと千金の價値ありといふべきであらう。

武士は、ノツコリ茶屋に立ちかゝつた。

「こりや女」

蠻骨武士は優しげもなく銅羅聲をあげてどなつた。茶屋の女はビツクリ、

「あれまア、あんたはん仰山な」女はニツコリ愛嬌笑ひをして、

「おかけなんせいな」

「うふ、ビツクリしよつたか、うは、ッ」武士はどつかりと露臺に腰をおろして、

「酒だく」

「おほ、酒かいな、ちやと待つてお呉れやす」女はちやらくと奥へ入る。

「う、い、景色だな、都の風は、やつぱりよいわい、なんとなら、おつとりとして



るよる、よかく、きのうにかはる今日の浪人、けつく身輕氣輕、とんとさつぱりと  
したものでや、こりや、やい、酒はまだか』

『はい、じきどすえな』

『早くせえ、腹の蟲めが、ぎゆくと鳴つてゐるわ』

『おほ、さうかいな、はい、どうもお待ちどうさま』

酒に酔のものをつけた膳を持つて出た。

『ほう、酒なうてなんのおのれが櫻かな、待ちどうしかつたわ』

武士はいきなり盃をとつて手酌でグビリ。

『女中、お前いくつか』

『はい、十九どすえな』

『二八を越えて憎くもない、十九とは愛い奴ぢや、酌せい』

『はい』

『祝儀はやらぬぞ』

『おほ、旦那様のおつしやることわいの、はいお酌』

『うふ、やつぱり女の酌はい、わ』

武士は勝手な熱を吹いてゐる、が、祝儀はやらぬの前置きは振るつてゐる、これな  
ら一番安全、承知づくなら、大威張りなものである。

『さア、どんく酌せい』

『はい』

『どうだな、このごろ、このわたりのやうすは、かはつたことはないか』

『い、え、いかい物騒や、ほんまになア、禁裏様方たら、公方さまがたたら、イガみ  
あつてゐるだになア、ほんまに、恐うおますだよ』

『ふ、そるか』

『あんたさん、きのうもなア、お江戸のお侍さんと、土佐方のお侍さんとな、きつい  
切りあひをなさつたげな、あたゝい、ほんたに恐うおすえな』

『う、それからどうした』



「お江戸のお侍さんがな、土佐のお侍さんを二人な、切つてしまつたといふわいな、でも、お江戸のお侍さんは、多勢だつたといふに仕方がないわいな」

「なんだ、土佐の侍を二人切つた、うゝむ憎い奴だ、土佐なら禁裏方だ、太い奴だ、江戸の腰拔侍め」

武士はとつた盃をペリ／＼と攪み割つて、大地へビシヤリ叩きつけた。

「あれ恐い」ビツクリした女中は、胸をかゝえて逃げだした。

武士は女中の去つたので、やつと、頓狂な自分の行爲にきづいたらしく。

「はつ／＼、こりや思はず話に身が入つた、どれ出掛けやうか、ほうれ、代を置くぞ」財布から、なにがしかのお錢をぼんと膳の上へ投げ出して、ノッコリ／＼立ち出でた。

數百年來、朝憲を武臣の手に奪れて、式微もその極に達したお禁裏さまも、どうやら、勤王志士たちの唱導によつて、やうやく、暗雲に蔽はれてゐた九重に、一縷曙光

の見ゆるも嬉し、だが、時代の一轉機には、どうしても混沌の紛亂を経なければならぬのである、で、このごろの京都の騒々しさは、とてもひとどつたのである、諸國の勤王の志士たちは、なにか風雲を捲き起さんとするの氣勢を帯びて、集まつて来る、幕府の方でも、そういつたやうな、不穩な舉に出でやうとする志士たち、もしくは、雷同する浪人達を取締るために、それ／＼の手配をしてゐる、なかにも、新選組なんといふ、一派の殺伐な連中を差し向けて、鎮撫とかなんとかいつて、迂亂だと思つて侍達は、容赦なく切り捨てるといつたやうな有様なのであるから、まことに物騒なものであつたのである。

目關笠強刀の武士は、ほろ酔ひ機嫌の、ほてつた頬を、吹き来る川風に煽らせながら、持つた鐵骨の扇で、はたく／＼と柄頭を叩きながら、なにやら謠らしきものを口吟みながら、急ぐでもなし、急かぬでもなしの旅、悠々緩々として、ぶらり／＼と川原を歩み行くのであつた。

と、向うから、たつ／＼と歩み来る一人の武士がある、羅脊板の打割羽織、蟲喰塗



無反りの大小刀をのぞかせて、緞子の野袴、小紋の脚半に草鞋がけといつた扮装、頭に頂く陣笠に、いはずと主ある武士とは知れる、だが、肩の反り足の運び、ちよつと人目を引くかゝりである、キザともいへばいへる、が、何處となく覇氣に充ちた立派な型とも見えるのであつた。

陣笠の武士は、このわたり珍しからぬものか、あたりの景色を格別氣にとめるでもなし、格別よきほどに手を振つて通り過ぎやうとするのである。

田舎武士は見るともなし、ちらと見た、陣笠武士も、ちらと見るとそのまゝ、二人は脊を隔てた、と、田舎武士は、ひよつと立ちとまつて、陣笠武士の後を見送つてゐた『氣骨のありさうな奴だな』田舎武士はかういつて獨り呟ちた。

陣笠武士は渡しを越すものと見えて、發船所のところで、ちよつと立ちとまつて、まだ舟も出さうもないと見ての一憩ひか、側の茶屋へかゝつて腰かけた、懷中煙草入を出して、煙管ですぱりくくと煙草を吸ひだしたやうす、と、誰やら、ばらくくと、陣笠武士の前へ二三人突つ立つた、襷、鉢巻、さつと振りあげる十手の光り、捕手の

ものである。

『御用ッ』

『待つた、無禮をいたすな、身共は土州藩の坂本龍馬ぢや』

『天下を覆させんとはかる天下の大罪人、坂本龍馬、神妙にいたせ』

『これはまた迷惑千萬、なにかの間違ひであらう、身共は主命を帯びて歸藩の途中ぢや、我等に疑あらば、何故まづ藩へ掛け合はぬのぢや、無斷なことをして後悔すな役目の落度とならうぞ』

『いふな龍馬、公儀御不審のその方、御用だ、神妙にしる』

『さて、心得ぬ奴原だ、理不盡の繩目、不淨な役人ども、無禮なことをいたさば容赦せぬぞ』

『捕れッ』

京都同心のなかでも、當時巾利きの早野信太郎、組子のもどもに號令した。

『御用ッ』



捕手のものども、十手を振るつて打つてかゝつた。

龍馬は面倒と足をあげてはたと蹶る、手を取つて逆に捻ぢ、とんと突き飛ばす、組みつくやつを振り落して投げつける、が捕手のものども、屈せずかゝるが、相手は當時日本随一の劍客といはれる、江戸は神田お玉ヶ池の千葉周作先生について、眞影流極意皆傳の武術家、容易に捕れさうもない、早野は、これは手剛いと思つて、ピ、一と呼子の笛を鳴らした、と、萬一にも遁がさぬやうに伏せてあつた組子の面々、群々と飛び出して來た、かれこれ、四五十人、どつと喚いて、たつた一人の龍馬を取り卷いた。

龍馬も、いまは必死となつた、二尺八寸無反りの一刀は、すらり抜き放たれた。

『頑迷不靈の奴ばらめ、近寄つて怪我すな』

捕手はどつと動搖めいて、さつと開いた、がまたもじり／＼と詰めたてる、袖搦み捕り棒などが飛ぶ、龍馬は巧みに潜つてばり／＼と切り捨てるが、大勢の捕手達ひるまず打つてかゝるので、龍馬も血路を開いて逃げるの外はない、奮然と一方の方

へ劇しく切り開いて、た／＼と駆けだした、捕方は、すはッとはかり追ひすがつて棒を振るつて打ちかゝつた、龍馬はひらり外して逃げ越さうとする間に、捕手はもう圍んでしまつた。

龍馬はまたも奮闘しなければならなくなつた。

『えいッ、蛆虫めら』

怒れる獅子のやうに、龍馬は暴れ出した、捕方達も、つい捕りあぐねるやうであるが、多勢をたのみに、またも打ちかゝつて來るのである。

このとき、河原でぼんやり見てゐた田舎武士。

『うむ、やる／＼、は、危い、やつ巧い、やる／＼』

譯は知らぬが、一人の武士、なにさま一角の豪傑と見える。

『豪い／＼、あゝすばり、鮮か』田舎武士はいつか確りと強刀の柄を固く握つてゐるもう腕がむず／＼するといつた體である。

さすがの龍馬も多勢の捕手に、ほと／＼と弱りが見えはじめて來た。



このとき件の田舎武士、三尺の大刀、すらり抜き放つた、そして、切つ先きをすうつと眺めてにつこり。

『どれ、親譲りの無名の業物、刃渡り三尺、血を吹かせてくれるか』

ノツコリ、近寄つた捕手の後、物もいはずに、『やつ』すばり、『えつ』と横に拂へば、生捕二つになつて飛ぶ。

『それ、曲者が現はれたぞ』捕手はどつと分れて、田舎武士に向つて来た。

『うは、来た、命の惜しくはない奴かなア』

三尺の強刀が、さつくと閃くと、新手の切先き、ばらりと切つて落す。

『やア、手剛い曲者、油断すな』

六尺棒が飛ぶ、躍り込んで組みつく、ひよつと身を振れば、ばらりとふつ飛ぶ。

『いづれの御武家か知らぬが、我等、義によつて、御助勢申すでごわす』

『頼み申す』陣笠武士の挨拶。

『お、よか』田舎武士は、鋭どく切り開く、捕手はもう半数以上も殺られたやうす

同心の早野も、もう、とても敵はぬと思つたか、

『引き揚げる』といつて逃げ出した。

組子の連中、幸に首がつかぬがる思ひで、ばた／＼と逃げ散つた。

『うは、／＼』と、田舎武士は、心地よさうに笑つた。

\* \* \*

『これは、いづれの御武家かは知らねど、危急の場合、御助勢下されかたじけなう存じ申す』

陣笠武士、見れば額の広い、面長の顔立で、白哲なところへ、濃い眉毛が勢ひよく

引かれて、眼に凜とした張りがある、月代青く、大髻、天晴れの人柄である。

『いや、ほんのちよつと、貴公、お怪我がなくてなによりでごわすわ』

『ほ、う、お見受け申すと、薩摩の御藩と存じ申す、くるしからずば御尊名を、

拙者は土州藩の坂本龍馬と申すものでござる』

『や、ッ』田舎武士は、ひたと呆れて、どنگり眼を睨つてパチ／＼、さながら鳩が



豆鐵砲を喰つたといつたやうす。

『さて、さうでござりましたか』と慌てたありさまである。

『いかにも、拙者坂本龍馬』

かういつて、龍馬はやうすありさうな田舎武士の素振りに、不審の思ひをする。

『して、御邊は』

『いや、これは大きに失禮でござりました、身共は薩藩、いや、いまは浪人、逸見十郎太と申すものでござります』

『ほう、やはり薩藩でござつたか、それは、ならば西郷吉之助御存じでござるか』

『やッ、西郷殿、大の昵近でござります』

『お、左様でござつたか、薩藩は勤王の御家門、近頃、珍重に存じ申す』

『坂本殿には、いかい御奮闘ぢやげ、かげながら、御高風をしたつてござつた』

『なに、微力のそれがし、なにほどのことが、なれども、時ぢや、どうやら、幕府の影の薄くなつたやうに存じ申す』

『わつはつ、心地よいこととてござりますな』

『して、御邊浪人せられたと、いかな理由でござつたかな』

『主家の祕密でござりますで、いひたくもない、なれども、要は、身共、家考島津豊後を討ちとり損ねて、この體でござります』

『ほう、それはまた容易ならぬこと、なんぞ、意見の杆格でもござつてかな』

『きやつ、姦賊でござりますでな』

『ほう、それは』

『つひ、出奔のやむなきにいたつてござります』

『御推諒申す』

『う、忘れたく、坂本殿、まこと身共は貴殿を訪ねて參つてござりました』

『お、さうでござりましたか』

『西郷殿、御添書をくだされた』

逸見は懷中より一通の書面、それは西郷から、坂本へ當てた書翰である。



『御披見下されたい』

『……………』

龍馬は西郷の添書を受けとつてさら／＼と讀みくだして、ぐる／＼と捲て懐中した  
 『わかり申した、承知いたしてござる、西郷氏にも御健固である由、珍重／＼』  
 といつて、龍馬は、ちよつと首をひねつた。

『逸見氏、見らるゝとほり、拙者主命を帯びて歸藩の途次、貴公、不自由なれど、身  
 共知るべのものへ寓つてはくださらぬか、半月ほどして歸京するはず』  
 『なにとぞ、よしなにお願ひ申すでござす』

『おゝさらば』

龍馬は懷紙をとり出し、矢立てを抜きとつて、なにやらさら／＼と書いて封じた。

『五條通り鹽釜町、花屋吉兵衛、そこへしばし滞留あれい』

『かたじけなうござす』

『さらば逸見氏、渡船も来たやうす、おわかれいたす』

『さらば、坂本殿』

龍馬はとん／＼と渡船場の坂を降りた。

『お客さま、出しまーす』 いろんな乗合ひが、どん／＼乗り込む、忽ち舟はいつぱい  
 になる、船頭がどんと棹を突くと、舟は三間ほどもさつと出る、淀の流れ、船頭は天  
 下泰平、なにやら船唄をどなりはじめた。

龍馬は船のなかごろに悠然として坐を占めてゐた。

陸の人と舟の人とは軽い會釋をかはした。

『噂にたがわぬ、坂本、天晴れな武士であるわい』

逸見はノツソリ／＼と立ちさつた。

## 戀の渦巻

京の都は五條通り、派手な模様の衣裳づくし、優しい女達のなだらかな曲線に、街  
 の気分は、また格別に情緒をそゝる。



その都大路を、ノツソリと歩く、野暴な男、それは逸見の十郎太、龍馬の添書をふところ、花屋吉兵衛を捜すのであつた。

田舎者には、目もあらたな都の街、十郎太は、ぽかん／＼と、キヨロつきな、田舎者丸出しのやうすである。

『うゝ、さすがだ、帝京、おいどんの鹿兒島とは、とんとやうすがちがらわい』  
通りには物いふ花が散り布いてゐる、連物は、すべて輪換のかんじ、素朴な十郎太  
ほと／＼感心してゐる、と、十郎太、不圖、行く先きを思ひついた。

『五條どほり、さうだ、このあたりか』十郎太は、ギョロリ、あたりを見た。  
誰れかに物問はうと思つたのである。

見れば優しい女、田舎で見た御殿女中よりは、うんと尤物である、紫ちりめんの裳  
模様、燃える緋のじよばんの端からちよろ／＼とのぞく、堅矢の字に結んだお納戸、  
立田散らしの刺繡の帯、風呂敷包みを捧げた供の女、はた／＼と摺りちがつた。

『これ／＼、お女中』十郎太、なんなら、こうした美形からおそはつた方がいゝ。

いけどんざいな蠻聲、本人ちよつと優しく掛けたつもりなんだが、がんと響いて、  
都育ちの早乙女には、魂の消し飛ぶほどである。

優しい女は、ビックリ面をかへて後とすざりをする、供の女中も迂亂な奴と、眼  
をばちくり、物もいはずに、逃げじたくである。

『うふ、物きくのだ』十郎太は、かういつてから／＼と笑つた。

この男、蠻物の癖に、妙に女に目尻の垂れる男である。

女達はやつと安心したやうに、頓狂な十郎太のやうすに危ふく噴き出しさうである  
『なにかいな』供の女中が、かういつた。

『五條通りの鹽釜町、花屋吉兵衛殿、しらんかな』

『鹽釜町かいな、ほんなら、これから、眞つ直ぐ、辻を二つ越して、右手へ入ると鹽  
釜町、そのあたりいつて、きかんしたがよいわいな』

『うゝ、そうか、よか／＼』

唐人の寢言のやうなことをいつて、十郎太は、ノツシリ／＼と、教へられた方へゆ



く、二人の女は、唇へ袖をあて、噴き出す笑ひを喰ひとめた。

『花屋吉兵衛殿といふはこちらか』門口から、銅羅聲がとほる。

『はい〜』

小僧がひよつと首を出す、恐さうな武士が立つてゐるのでびつくり、目をバチ〜

『はい〜』

『花屋吉兵衛どのは御當家か』

『はい〜、さうとすがな』

『御主人にちと會ひたい』

『はい〜、ちと待つてお呉れやす』小僧はとん〜と奥へ入る。

やがて、主人の吉兵衛、禿ちやびんを、つるりと撫で〜。

『へ、、、ツ、お武家様、私しがへい、吉兵衛でおますがへい』

『あ、吉兵衛どのか、身共は薩藩の浪人、逸見十郎太、坂本龍馬どのお添書を得て

參つたものでござわすがな』

『は、ア、あの坂本さまの、お、さうでおますか、さ、まア、お掛けくださいませ』襦を出す、煙草盆を出す。

十郎太、遠慮は大嫌ひ、どかりと襦に腰をおろす。

『どのやうな御川事でおますかなア』

『お、それ〜、添書があるぞ』

十郎太は懷中の龍馬の與へた一封の書面を出して、吉兵衛にわたした。

無學な吉兵衛、とんと合點がまるらぬのである。

『へ〜い、どうもその、日本の文字なら讀めますが、唐の文字ぢや、からつきし讀ませぬ、あんた、ちやつと讀んでおくれやす』

『う、さうか』十郎太、とつて見る。

『う、美事な筆蹟だな、いゝかな』讀み出す文言  
啓す。



『はいく』

拙者事、途中、伏見の渡船場にて、はしなくも、頑迷なる幕吏に襲はれ、

『やれく』

まさに危き打柄

『ほう』

これなる逸見氏に救はれ、無事、渡船いたし候

『それはく』

同氏は薩藩の士、拙者同志の者なれば、厄介ながら、當分お世話頼み入る。

『はいく』

念のため申し置く。

『なるほど』

逸見氏は性來、豪放磊落、頑狂の人物なれば、

『は、ア、なるほど』

随分、注意、萬粗勿なきやう取り扱はれたく。

『はいく』

萬一無調法などあらば、首が飛ぶやも知れ申さず。

『やれ、大變く』

きつと丁重に歡待しかるべく候。

『はいくもう』

たゞし、善人なれば、その邊御安心これあるべく。

『やれく』

お柳へも、しか申しふくめ頼み入り候。

『はいく』

以上、龍馬より、吉兵衛どの。

『はいく、わかりました』

『うは、ッ、坂本氏、名文く、そのとほりく、吉兵衛どの、頼み申す』



「え、もう、なんの氣兼ねもないこと、どうぞ旦那さま、首だけはなア、滅多なことをされては、こまりますがなア」

「わつはつく、大丈夫、よかく、案ずるない、よかく、わつはつく」

京育ち、清い鴨川の水に洒しあげたやうな、クツキリと肌の白い、襟足の繪から抜けたやうな、久米仙でなくとも、十郎太、ぞつとするほどに美しいお柳の姿、文金島川濡れ羽髪、水の濁たるばかり、さても愛い女、十郎太はばかんとお柳の顔を見つめた。

お柳は、きまり悪るさうに顔を背向けて、

「逸見さま、龍馬さまが、いかにお世話におなりなされしといふこと、しん、お禮申しますわいな」かういつて蠟細工のやうな指を突いて、につこりと微笑んで、チャーミングな眼で、じつと見上げた眼、ビタリと會つた十郎太のどんぐり眼、吸ひつけられたやう、ぼーうとして、挨拶もちよつとどぎまぎ。

「う、えいなに、その、これはどうも、いや」

十郎太は、わけのわからぬことをいつて、四角張つて、ビタリと頭を下げた。

「まア、逸見さま、そのやうに、御笑談、あたし、いやどすえな、ホ、ッ」

妙な十郎太の態度にお柳はつひ笑ひこけた。

「いや、どうも」

十郎太は大眞面目、思はずぼーうツと上氣して、頬に紅、赤鬼がゝるもしほらしい

「まア、お茶なと一つ、上りませえな」差し出す、お柳の手。

「ほうこれは、頂戴いたす」茶托を掴んでとれば、どうしたはずみか、茶椀はころりと轉んで、茶がさつと疊へ走つた。

「ヤ、ッ、これはとんだ粗忽、平に」十郎太は大あはて、袴の裾で拭はうとする「あれまア、よろしうおますわいな」

お柳は、つと立つて、雑巾をとつて、さつと浸しとる、十郎太、あたり男の粗忽、どうやら、値うちのない男と見られさうなので、すつかり憎れかへつた。

だが、美しい女、それが自分の不始末を、始末してくれる、嬉しいやうな、淋しい



やうな、妙な気分である。

『これはどうも、恐れ入つ、恐縮〜』

十郎太は、てれかくしに、かういつて、跋をつくるつた。

『いゝえ、なんのいのう』粗忽な武士、愛嬌があつて、そのなかに可愛らしいところがある、お柳はほくと笑ひを含んで、優にやさしい。

十郎太、胸のどきつくやうな心地がするのであつた。

それから、十郎太はお柳のことばかり考へてゐる、そしてこのやうに美しいお柳と一つの家にゐることは、どんなにか幸福なことであると、獨り思つてゐるのであつた

\* \* \*

その日は吉兵衛はお花客さまへ、用事があるといつて出ていつた、女房のおいまは誰やらの命日、普請文をあげてもらはにやならぬといつて、これも、菩提寺へお参詣とある、家のなかにはお柳と十郎太ばかりであつた。

お柳は茶の間で、なにやらお針仕事である、が、浮かぬ色が見える、ときたま、ほ

つと吐息をつく、お針の手をとめて、思案顔になる。

かれは戀しい龍馬のことを考へてゐるのである、そつと目をつむると、嬉しい嬉し  
い思ひ出が、走馬燈のやうに、目の前に展べられる、ほつと獨りで美しい顔に紅葉が  
散る。

三條様のお邸で、あの築山の四阿やで、逢魔が時のたそがれに、龍馬さまの膝にとりついて泣いたとき、忘れはせぬ嬉しきどおつしやつた、それから、かうした思ひが叶つた仲となつた、豪いお方、優しいお方、凛としたお方、勇ましいお方、このやうなお方に、このやうに愛される身は、なんといふ果報なことであらう、だが、大事とやらのある身體、今日は西、あすは東、ついぞ滅多にしんみりと、割ないなかのたらしひをする日とても計へるほど、こんどもこんど、お歸藩なされて、半月あまりのお滞留、途中での變事、考へると、ほんに頼りなくなる、大事とやら、なんの人事、そんなことよりか、なにもかも、さらりと捨て、龍馬さま、いつもあたしのふとこるへ抱いてゐることは出来ぬものかいな、いや〜、そんな事をいふたら、龍馬さま



どんなに御立腹なさるやら、あゝ勿體ない、禁裏さまのお爲め、命を捨てても喜んで死ぬるのだと、いつもくあんのやうに、御熱心な龍馬さま、ほんに、日本六十餘州のため、ほんとの道をお立てになつて、まがつた世のなかをためなほしてやるとおつしやる、尊いお心、ほんに、このやうな、私事の考へをもつたなら、龍馬さまの妻ぢやないかと笑はれよう、あたしとしたことか、やつぱり、いや〜。

お柳は、いろんな事を考へて、ほつと吐息をつくのであつた。

戀しい龍馬さまは、危ない橋を歩いてゐるやうに、陰身につきまとう、いくたの劍がある、ほんに油断のならぬ身である、さう思ふと、お柳は堪へがたい不安と淋しさに襲はれるのであつた。

\*

\*

\*

\*

そんなことゝは知らぬ十郎太、意馬心猿、たゞもう、このごろはお柳のことは考へてゐる、蠻物のかれも、どうやら、このごろは、ちつと瘦せたやうな氣持ちであるのである、それほどかれは、お柳にまゐつてしまつたのである。

今日はちようど幸ひ、吉兵衛夫婦、小僧もゐない、天の與へた好機會、こんな機會を逸しては、神の心に反すると、いつたやうに考へたかどうか、十郎太、奥の一間でさつきから腕拱みをして、じつと考へてゐたのであるが、思ひ切つたやうに、つと立つて、ノツソリ〜茶の間の方へ出て來た。

お柳は、考へごとに、氣づかずゐる。

お柳殿〜

お柳は、ビックリ、振りかへつて見ると、十郎太がノツソリ、どうやら、面喰つたやうにまご〜してゐる、頓狂な男、お柳はかう思つて、別に氣にもとめずに。

『あらまア、逸見さま、お退屈でございませう』

『いやはや、とんと退屈はしないでござす、おいどんな、お柳さんと、一つとこだと思ふと、嬉しいんだ』

十郎太は、かういつて、とんと腰をおろして、そこへ坐り込んでしまつた。

『ほ〜、まア、御笑談ばかり』



『いや、しんもつて、ほんとぢや』

『あれ、あのやうなこと』

『まつたくもつて、眞實ぢや』

大眞面目に、眞顔になつて見る十郎太の眼に觸れると、お柳もさすがぎよつとした

『ホ、、、逸見さまのおつしやることわいの、そのやうな笑談おきやんせえの』

『いや、お柳どの、拙者ぞつこん、そなたに惚れた』

『あれ、まだそのやうな』お柳は、笑談にして打ち消さうとするが、十郎太、鬼面顔にほつと赤くしてのかゝり、笑談とは思はれぬ、お柳は思はずあとすざりした。

『笑止ながら十郎太、戀の奴となりおはせた、お柳どの、拙者の心、あはれんでくされ、このとほり、このごろ瘦せ申した』

『……………』

お柳は、いまはもう挨拶も出来なくなつた。

『お柳どの、このとほり、頼む、拜む、拙者の戀、叶へてくだされ』十郎太、眞實し

んから、奔馬を投げとばす剛の拳を、甲斐なく、あはせて口説のであつた。

『……………』

『お柳どの、なんとかいつて下され、拙者、このまゝなれば、きつと戀焦れ死ぬでござす、この家へ来て、そなたを一目見るより、戀の魔に、ぞつど、とつゝかれ申した面目ないがこのとほり、身も心も細るやうだ、お柳どの頼む、この戀叶ふて下され』

お柳は、恐いやら、腹が立つやら、氣の毒やら、そんなこんながこんからがつて、たゞ呆れてものもいへないのである。

『これ、お柳どの、これほど、拙者が口説ても、そなたは、叶ふて下さらぬのか』

『逸見さま、あたしのやうなものを思つて下さるのは、ありがとうおますけれど、えんないものとあきらめてくださいな』

『なにッ』逸見は、むら／＼と怒りをあらはした。

『それぢや、武士たるものが、このやうに頼んでも、そなたは嫌といふか』

『は』



「おのれッ」十郎太は、強刀を引きつけて、血相かへて立ちかゝつた。

「龍馬さまへ立てる操、命にかけて、破れませぬ」

「うゝ、なんと」十郎太は、べたりとへたばつてしまつた。

「そんなら、そなたは、坂本殿と」

「はい、二世かけて」

「うゝつ」十郎太は、うなつて、ぐつたりと力が抜けた體である。

「あやまつたゝ、そんなら戀なぞするでなかつた、面目ござらぬ、お柳どの、ゆる

してくだされ、このとほり、平にゝ」

十郎太は、手を突いてあやまるのであつた。

十郎太は、こそゝと奥の間へ逃げ込んで、太息を吐いてゐる。

「坂本、やつぱり戀の手腕も、おれよりは、ぐつと上だ、しつばいゝ」

十郎太、もう、けろりとお柳のことは思ひ切つてしまつた。

これからは十郎太、お柳を姉のやうにあつかつてゐる、可愛い男である。

禁裏御所の薨の見える、鴨川べりの、とある松の木のもと、大兵の武士一人、うつ

とりと、御所の薨をのぞんでゐる、清い流れが、たらゝと、女の肌のやうになだら

かにながれてゐる、夕景のそゞろあるき、さりとは、京女の、思ひ出さるゝ情景

である、が、武士は、なにを考へてゐるものか、たゞひたぶるに、御所の方を見つめ

てゐる、あたりはもう、ほのぐらくなつてゐる、人影もちよつと杜絶えた。

武士は、やがて、踵をかへして、ノツソリゝと歩き出した。

すると、忽ち、あれいといふ女の喚き聲がきこえて來た、武士は、はたと立ちとま

つた、聲のする方をきつと見ると、たしかに見える二本棒、びんと尻にはねかへつて

ゐる。

「うゝ、武士ぢやな」ばたゝと一つの影が、一つの影をすりぬけて逃げかけた、露

に現れた脛の白さ、袖はためき、女である、武士が道行女にたはひれてゐるのである

「太い奴だ」武士はまだ立ちつくして見てゐる。

そんなことゝは知らぬ男と女、しきりに、争つてゐる。



「え、ッ、けがらしい、放して呉れやす」女は身を悶えてのが

「これさ、まア、そのやうに嫌つたものでもあるまい、なア、から見えても大層！ 眞實をとこぢや、おことが、うんと身共に靡いてくれるなりや、なになりと、おことのいひなりしなり、しんたがひはしない男ぢや、な、よいか、自慢ぢやないが、おれなんざア、男はちよつとわるくとも、味はつて見れば味はつて見るほど味の出るそれ〜かつぶし男といふやつだ、これほど、いつぞやから、思ひのたけを口説親切男を、袖にするなんとは、そりや姫御前のあらぬもない、胸慾なといふものだわいのこれさお柳、なんと、じらさずと、色よい返事をきかせて呉れたがよいわいやい」

男め、芝居もどきに口説いてゐる。

「嫌だといつとるに、あんた、かいせうなし、あたし、ほんまに嫌どすえ、え、もう〜放してくれさす、放して〜」

女は、頑固にこぼんで、とらへられた袖を振り拂はんとする。

「お柳、そりやお前、野暮や、そんなこといふたら、身共、もう承知せんぞや」

「お勝手になさんせいな」

「こやつが〜、すりや、おのれ、どうしても、身共を振りつけるんだな」

「嫌どす〜」

「ほんなら、身共にも覺悟がある、よくしつとるんぢや、おことの情人な、坂本龍馬といふ、公儀御不審の曲者ぢや、よいわ、ほんなら、身共、お父様は、吟味與力、いひつけて、龍馬めを搦めとらしてしもう、そして、おことも謀反人一味のものとして拷門にかけさせる」

「エ、ッ、なんといふのや」

「ハ、ッ、驚いたか、はッ〜、さア、龍馬もおことも、殺さうと、生かさうと身共の胸三寸、な、わかつたか、さア、色よい返事をしたがよい」

男は、またも女に抱きつきかゝつた。

「あれい」女は、抱れた腕を振りとかんとするが、男の腕、悶くはづみに、女は小石に躓いて、はたと倒れた。さつきから、木蔭に見てゐた武士、



「なにッ、龍馬、さては、お柳どのか」武士は、ばら／＼と駈け出すと、物をもいはずに、出齒武士の袴首つかむと、ひよつと引きづりはなした。

「お柳どのか」

女は、はつと顔をあげて、武士と顔を見合せ、

「お、逸見さま、まア、よいところへ」

「いや、けしからぬ奴でござす、こいつ、何者でござすな」

「吟味與力、大瀧惣右衛門さまの息子とやら」

「う、憎いやつめが、おのれ、天下の政道を預る、奉行直下の吟味與力を父にもつ

て、このさまはなんぢや、馬鹿め、かうしてくれる」十郎太はいきなり、馬之丞を、

一振りふると、ぶーん、風を切つて、鴨川へ投げ込んだ。

「あつ」馬之丞は、くる／＼と二つ三つまはつて、川のなかへ、どぶーん。音をたて

て落ち込んだ、白い水煙りが、ぼつとあがる、大きな渦紋が流れる。

「あれまア」さすがに女、お柳は、一人の人間の死をいたむのか、胸をどきつかせて

水面を見た。間もなく、ぶく／＼と浮きあがつた男の頭。

「あぶ／＼／＼ブ、／＼、ツ」

馬之丞、しきりに、水を吹いて堤を目覚めて、ばちや／＼やつてゐる。

二人は、あと白浪、馬の泡ぶく、「大白痴め」がと冷笑つて立ちさつた。

やつとの思ひで、堤へ這ひあがつた馬之丞、溢面つくつて、

「やれ、畜生、えらい目に遇はせやがつた、覚えてゐろ」

びしよ濡れの濡れ鼠、人目を避けてこそ／＼と、身をすくめて走りさつた。

## 鴨川の争闘

先斗町のほどちかく、彦根屋敷のなか、新選組浪士の一團の秘密の住居。

いづれも、腕自慢の連中、大天狗小天狗鼻高天狗からす天狗、天狗競へで氣焔をあ

げる、はなすことも、武張つた功名ばなしばかり、まけたまの字も口にしない、かつ

た／＼で大陽氣、いま、酒宴の最中であつた。



そこへやつて来たのが、大瀧馬之丞、胸に一物、今日はことさらに身装を整へて、黒羽二重の紋付、茶の義経袴、細身の大小刀、髪の毛のほつれも見せず、ひたりと油で光らせてある。

「これはく、新選組の方々、いづれも御勇名のほど、かげながら敬伏つかまつる、さてはまた、御酒宴の折柄、卒爾の御伺ひ、御酒興の妨げともならば、恐縮、平に御容赦あられせられ、身共は、吟味方與力、大瀧惣右衛門の愚子、馬之丞と申すもの、なにとぞお見知り置かれませれば、望外の幸榮」

馬之丞は末座の方で、ペコ〜と頭を下げた。と、上席の方で、大あくらをかいて袴の膝へ、節くれだつた臂を張り、左の手に大盃をとつた、眉の濃い、眼のギョロリとした、大髻の男、

「ふん、大瀧氏の御息か、拙者は、近藤勇でござる、なんぞ用かな」  
とんと、馬之丞など眼中にないといつたやうす、なり損ねの色男、てんから、相手になりさうにも思つてゐないのである。

「これはく、恐縮仕る、御高名の近藤殿にいらせませるか、こんど、京師鎮撫のためわざく御上京、近頃御苦勞に存じ奉る」

「いやく、京師騷擾ときいてまかりとしたが、さて、とんと面白いこともない、なにか、手に立つやうなものでも對手に、小氣味のよい決戦でもしなくては、腕が鈍つてしもうといふものだ、はつく〜」

「さてく、御勇氣のほど、恐れ入つてござる、なか〜もつて、激徒の面々も、迂濶に騒がれぬことござりませう」

「はつく〜」  
「そうぢやく、猫に出られては、鼠も騒げぬであらうて」

近藤は大威張り、手にした大盃を呷つと飲み干した。

「大瀧氏、一つまるるかな」

「ハ、ツ、大勇のお流れ、一ツ頂戴いたしたきものにござります」

「ほう、まづ」近藤は盃をぼんと馬之丞の處へ投げやつた。



馬之亟はびつくり、はつとして顔色を變へた、盃は、はつと胸に當つて膝へ落た。

「大瀧氏、まづ一献」側の一人が銚子をとつた、馬之亟は、どきまぎして、

「は、これは」慌て、轉がつた盃をとりあげた。

浪士たちは、どつと笑つた。

馬之亟は、こんどは赤くなつて澁面つくつた。

馬之亟、やつと盃をとつて差し出した、銚子が、ひたツと盃の縁へ當る。

「は、恐縮」馬之亟が盃をずつと遠慮して上げやうとすると、銚子はすつと引つ込

まされた、盃のなかへは、酒がたらくと底にした、つて見えるばかり。

馬之亟は泣き出しさうなやうすである。

「はつ、これは大瀧氏、下戸と見えるな、はつ、下戸に酒を強める

もともと興がない、で、御用はなんぢや」近藤の眼は、ギョロリとした。

得たりと、馬之亟は急に元氣を盛りかへして來た。

「是非とも、御一統の手を借りて、成敗しなければならぬものがござります」

「ふむ、誰ぢや」近藤は意氣込んで見えた。

「薩州浪人も、逸見十郎太と申すものにござる」

「うむ、薩州か、讀めた、よし、どういふ奴だ」

「坂本龍馬一味のものときとめました」

「坂本一味、うーむ」浪士達は坂本一味ときくと、急に坐がさつと動揺めいて、各々

にひきしまつた氣が流れる。

馬之亟は、たと北叟笑んだが、眞面目顔。

「なか／＼の曲者にござる、力は牛を屠る金剛力、劍は三尺の剛刀、一刀流免許の腕

前、一たび暴れては、忽ち數十の死人をつくる、恐ろしいものにござります」

「ふむ、面白い」近藤は浪士達の顔を見た。

浪士達はもう眼を光らせてゐる。

馬之亟はもう大得意である。

「拙者めも、かれには、えらい目に遇はされました」みなは、くすりと笑つた。



『まことでござる、五日まへでござつた、拙者、夕景のつれづれに、鴨川縁を散策いたしましたに、見るからの田舎武士、松の幹に寄りかかつて、禁裏の薨が空に浮くのをながめてござつた』

『なるほど』

『すると、そやつ、かう吐きました。草莽の微臣、逸見十郎太、禁廷の式微を見まらせて、轉た涙の滂沱たるを禁ずることが出来ませぬ、さあれ、上天も御照覽、臣等坂本龍馬等の同志と相謀り、きつと潜越横暴の幕府を倒し、天朝の御代をつくります』

『うーむ』

『と、かう申しました、拙者も幕府の恩祿にあづかる身、このやうな無頼漢を捨て置いては、累世の御高恩に對してすまぬと存じまして、對手の油断を幸ひ、抜き足、差し足視ひより、心得たりと全身の力を切先きに込めて、えいつやつと、脇腹目菟けて突きかゝりました。』

『したり〜、それから』

『ところが曲者、いやはや、面目次第もござらぬ、美事仕損じました、かなたは曲者ふつと體を躲しましたので、拙者、つひよろ〜とよろけて偃り出るところを、ぎゆつと衿首をとられえられ、あつといふまもなく鴨川の眞つたゝなかへ、どんぶとばかり投げ込まれました』

『はつ〜、やれ〜泡ぶくを吹いたであらう』

『いやはや、泡を吹くどころか、鴨川の水、腹一杯に喰ひ申した、やつとのことで、命から〜、堤へかきあがれば、身はまるで濡れ鼠、憎いやら口惜しいやら』

『うむ〜』

『幸ひ、ノツソリと行く逸見の姿、後をつけて、ありかをつきとめて、後の復讐と思ひ込めました』

『なるほど、さすが、吟味與力、大瀧氏の血ぢやな』

『そこはその、親ゆづりの心得、萬ぬかりはござらぬ、それとも氣づかず、ノツ〜と入つたところは、五條通り、鹽釜町、花屋吉兵衛の家でござつた』



「うむ、よしわかつた」

「希代の曲者、御油断なく、お斬捨てが願はしうござる」

「よいわ、我々が目をつけたからには、金輪際、天魔鬼神でものがしはしない」  
「ひたすら御願ひ申し入れまする」

「おゝ」

「それから」

「なんぢや」

「坂本龍馬」

「ふむ」

「吉兵衛の娘と関係がある氣、なにかのたりよにもなりましよう」

「そうか、よし、よいことを聞かせてくれた、なりや龍馬、いつか斬り捨てる」

「なにとぞ」

「いまは歸藩の由、追つて四五日中に歸へるとかいふこと」

「さうか、さア、面白くなつて來たぞ各々」

「さうぢや、近藤氏、坂本一味なら、對手にとつて、近頃の快事ぢや」

「うむ、まづ、勇氣をやしなつて置くことだ」

「いかさま」

馬之丞は、巧々と、逸見を死地に陥入れた、さうして、龍馬も巻き添ひになる、策  
戦は上々首尾である、かれは赤い舌を人知れず吐いたのである、めめ〜。

「さらば各々様方、永居は失禮、これで拙者お暇仕ります」

「おゝ、これは、よくわせられた、また、ちよい〜來られい」

「忝じけならござる、各々様方、御免」

馬之丞は、ペコ〜と叩頭をして、さつそくと退きさつた」

「巧くいつた」馬之丞は、げら〜と笑つた。

逸見十郎太、食客の身、三杯目にはそつと出す筈の、肩身のすくんだ身分なのだが



これはまた、とんと遠慮なんぞは忘れて来た男、飯も、七八杯は平気でべろり、晩の三本の銚子も飲み足りない、ぶらりと出掛けて茶屋酒をきこしめす、内に居ても用のない身、奥の一間は、自分の城廓、こゝ一城の主とあつて、寝やうと起きやうとま、なまぬるい讀書なんといふ七面倒なことは大きらひ、一間へ入ると、ころりとふんぞりかへつて大の字なり、いまでも轟々たる大軒で、心地よく午睡とある。

そのときであつた、花やの前へ訪れた三人連れの武士がある、いづれも並々ならぬ面魂である。

『あゝこれ頼む』なかの一人が、かういつて訪つた。

『はい』お柳が、ちやうど、そこらあたりの取りかたづけをやつてゐたので返事した見ると、荒くれた武士たち、ヌックリと、入り口一杯に立ちはだかつてゐる、お柳はなにかなし胸のさはぐを覺えた。

『逸見氏、御在宅か』なにげないである。

『はいあの』お柳も、さすが用心深いのである、じつと武士たちのやうすを見た。

『お在宅かどうか』いよゝ怪しいものどもである。

『あの、お留守どすかなア』お柳は、けるりとして答へた。

『留守だッ』武士は同僚をかへり見た。

すると、他の一人の武士がつと出て、

『身共ら、薩藩ぢや、逸見氏に會いたいのだが』

『まアお氣の毒どすえなア、いましてた逸見さまはぶらりと出なはんしたかなア』別に怪しむところもない、自然な調子である。

『それは残念であつた、どつちへ行かれたかわからぬか』

浪士たち、うまと乗せられて、かう問ひかけた、もう充分にしてのけたのである。

『さいなア、わかりせぬかなア』

『いつごろかへられるか、わからぬかい』

『さア、わかりませぬかなア、間もなくおかへりはんすこともあり、二日三日とお泊りなさることもありますもの』



浪士たちは、顔を見あはせて、がっかりしたやうすである。

『おい、いつともわからないのでは、待ち呆けもつまらないな』

『さうだ、二日三日も待たされて、たまつたものでないわ』

『いかさま、出直すとしようではないか』

『それがよいわ』いよく今日は断念のやうすである、お柳はこそばいやうな勝利を感じた、もちつとなぶつてやれ。

『あの、折角來なはんしたになア、逸見はんはな、祇園とやら島原とやらに、可愛い人があるやら、おほかた、そんなところかも知れぬわいなア』

『そうか、いや、失禮した』浪士たちはうまくのつて御足勞さまである。

\* \* \*

浪士達は出てゆく、お柳は店の取りかたづけにかゝつた。

そのとき、ノツコリとあらはれた逸見十郎太。

『あつはア〜〜』と突然に笑つた、お柳はびつくり。

『まア、逸見はん、あたしびつくりしてよ』

『お柳さん、軍師だよ』

『あら、聞いてゐらしつて』

『騒々しいから、こつそり、こゝで立ち聞きした、迂亂の奴等だ』

『でもなア、龍馬さまも、いつも、そのやうなものにつけねらはれるとおつしやるから、あんたはんも、やつぱり、油断はならぬと思つたもんやで』

『それは〜、實はな、お柳さん、對手はたつた三匹、なに一捻り、びくともするんぢやないが、お柳さんには、おいどんよわつたよ』

『あら、なぜ』

『可愛い人が祇園とやら、島原とやらには、十郎太、すつかりまるつてしまつた』

『ホ、ホ、ツ、でもなア、かつひでやつたのよ』

『はつ〜〜、よか〜』

『おほ〜〜、二人は笑ひこけた。』



『それはさうと、坂本どの、もう、かへられたであらうかどうか』  
 『さいなア、もう、おかへりになりさうなものやけど』  
 『かへられたなら、なんとか、お知らせがありさうなものだが』  
 『……………』

このときである、表戸が、がらりと開いた、見れば、さつきの三人づれである、眼をいからせて、もう、抜き討ちのかかりである。

『あれい』

お柳はさすが恐さに、われをわすれて上へにげあがつて、十郎太の蔭へかくれた。十郎太は平氣の平左、苦笑ひしてつつたつてゐる。

『逸見十郎太といふのはの貴様だらう』前の一人が居合腰になつて問ひかけた。

『騒ぐな』十郎太は、やにはに一喝した、まづ度肝を抜くだけのかちはある。

『おいどんな、逸見十郎太だ、なに用だ』

『坂本一味の逆反人と知つて、我々新選組の手で天誅を加へてくれる』



(1) 巷の闘亂



武士は、じり／＼と詰めよつた。

「わッはッ／＼、噂うはさに聞きいた、新選組しんせんぐみの暴あはれものたちか、よかく、騒さわぐな、おい  
 どんな、この家いへには、いかい厄介やくがいになつてゐる、こゝあらずも面白おもしろくない、鳴川縁なりがはべ  
 人に迷惑めいわくかけずに來こい」武士も氣きにのまれて、たじ／＼となる。

「うむ、よからう、よし、それでは鳴川なりがはの水葬すみさうにしてくれ」

「よかく／＼」十郎太じゅうらうた、てんで、ものとも思おもつてゐないやうすである。

三人さんにんの浪士らうしも、ちと、薄氣味うすざみわるい相手あひてと思おもつた。

「まア、さきにいつて待つてをれ」

「逃にげると承知しょうちしないぞ」

「馬鹿ばかッ、薩摩武士さつまぶしには腰拔こしぬけは一人ひとりもないわ」

「よし」

「うかの辻つじを越こえて五六町ごらふちやう、渡船わたしのあたりで待つてをれ」

「きつと來こい」



『馬鹿め』浪士達は、すた／＼と立ちさつた。

『逸見はん、大事ないかいな』お柳は、ふるえながら気づかつた。

『ふ、なんの、大事ごわせぬわ』

『でもなア』

『心配無用』十郎太は奥へ入つて身ごしらへをすると、笑ひながら出て行つた。

\*

\*

\*

\*

ノッコリと鴨川べりへあらはれた十郎太、渡船場ちかく、あたりをずつと見わたすと、河原の楊に添ふて、三人の武士の影。

『う、ゐたな』ノツシリ／＼と、向つて行つた。

浪士達は、逸見と見ると、さつと三方へわかれて身構へた。

『さア来い』十郎太は、三尺の強刀、すらり抜いて、中段にかまへた。

『それッ』浪士たちは、じり／＼と詰めよつた。

『やつ、斬りあひだ、お、恐い／＼』

折からの渡船客は、白刃の光りにおびえて、どつと逃げ散つた、側杖くつては大變遠巻きになつて見てゐる。

『どうどす、一人の武士、強さうやな』

『ほんまになア、だけど、對手は三人やけになア』

『あれなア、新選組や、一人の武士を打つ斬るのや』

『でもなア、あれ、豪ア、長い刀やなア、あないな刀、振りまわすに骨やなア』

『ほんまになア、恐や／＼』

『やつ、斬りつけた、わつ、危い、ほい、よけた、ひやツ、一人やられた、一人の方

の武士、豪いもんやな』

『あないな長い刀振りまわされたら、あかせんわな、三人でも割が悪なものなア』

『でもなア、短い刀は、使ひやすいによつて、得どすとい』

『あなた、そないに、いはさんしたて、論より證據や、あれ、一人殺されたがなア』

『……………』



「あッ、危い、ほい、しまつた、刀を打ち落されたつせ」

「やア、組みついた、お、また組みついた、はつけよいや、一人に二人、わッ、あの侍強力やな、びくとも動かないもんなア、ほい、引き摺つた、やつ、振つた、どつこい、ほぐれた、やつ、衿首、ひやッ」

大勢の見物人が、いろんな眼、いろんな批評をやつて見てゐる。

「うわッ」見物は、どつと喚いた。

そのとき、十郎太は片手に一人づつひつさげて鴨川の流れ遙かに力任せに投げつけた。右の手は片手なげ、幾分よわいが、クルクルと先斗うつて、どぶんと落ちる、も一人は両手に掛けて、二振り三振り、勢をつけて、

「えいやッ」矢聲をかけて、投げ飛ばした。上へ三間、先きへ五間、浪人、空中飛行をやつて水中滑走でもやるつもりと見えて、ぱちやん、水面へ落ちたのである。

「わつはつ〜〜」

十郎太は、大きく笑つて、刀を鞘に、ノツシリ〜と立ち去らうとした。

そのとき、群集のなかに、深編笠の武士があつた、群集の後から人知れず見てゐたが、十郎太が悠々として去る、後から、なにげないでついて行くのである。

十郎太は定めしお柳さんが、心配してゐることであらうと、まつすぐに、うかの辻へかゝつたときである、後から呼びとめたものがある。

「逸見氏〜」

十郎太はきつと見かへつた、深編笠に面は見えぬ、黒羽二重の紋のついた打つ割き羽織、蟲喰塗りの大小刀、お納戸献上の帯に、りうとして手挟んでゐる、身分あるらしい武士である、十郎太は、はたと立ちとまつた。

「身共でごわすか」深編笠の武士は近寄るまで無言。

「拙者でござる」深編笠の面をのぞけば、意外、坂本龍馬であつた。

「あッ、坂本殿でごわしたか」

「坂本でござる」



『これはく〜』

『昨日、戻つてござる、用事をすませ、いま、御邊のところへ訪ふ所存のところ、はからず、いまの打ち合ひを見申した』

『さうでござしたか、おいどんな、一向知らずに、失禮いたしました』

『美事な御手のうち、近頃、快心のごとでござつた』

『はつく〜、ほんの腹ごなし、はつく〜』

『いかよりの行きちがひから、かようなことをなされたか』

『新選組のものどもとか、先刻、花屋かたへまゐり、理非もいはず、謀反人とか申し果し仕度にごさる、花屋方をあらずも氣の毒、河原へさそつて斬捨て次第でござす』

『ほう』坂本は、じつと腕を拱んだ。

『油断がならぬは、逸見氏、新選組、無頼のものども、おつ〜け、また押し寄せんも知れず、また、つけねらうは必定、うむ、逸見氏、これより、拙者藩邸へ來られい』

『なにとぞよろしく』

『それはさうと、刃傷のこと、辻番へ届けずばなるまい』

龍馬は、つと、辻番小屋へ入つて、とりつくろつて届けた。

二人はともかくもお柳の方へ顔を見せてといふので、打連れて花屋へ向つた。

『お柳〜』

表へかゝつた人の聲、忘れられぬ人の聲、眞つ先きに耳にしたのはお柳である。

いまでも、お柳は、母と二人で、十郎太の身の上を案じながら、淋しい落ちつかぬ胸の動悸を語り合つて、どうぞ無事であればよいと、色も腿せてしほれてあつたのである、が、こんななかにも、忘れられぬは戀しい人、龍馬のことであつた、あの方もやつぱり、十郎太とおなじやうに、幕吏や、新選組とやらの荒くれ武士たちに、つけ狙はれてゐるのである、さうすれば、十郎太の身の上は、すぐ、龍馬の身の上にも引きくらべて見ることが出来るのである、とすると、龍馬さまのことも、やはり氣掛りでならぬのであつた、もう、昨日あたりは、お歸りといふことであつたのに、いまだ



になんのたよりもない、もしや、途中でひよんなことでもなければよいが、淋しい頼りない心は、いやが上にも神経をたかぶらせて、とめどもなく、いまはしい心配ことの幻影に、やるせなく心をかきむしられるのであつた。

かうしたお柳の心には、龍馬のことが一杯である、いま訪つた人の聲、お柳は直ぐと嬉しい人の聲であると、胸を打つ嬉しい鼓動に、こみあげるばかり。

『あらつ』お柳は、つんと首をもたげて聞き耳を立てた。

『お柳』

正しく龍馬の聲、お柳は、あはたゞしく立ちあがつた。

『お母さん、龍馬さまよ』ちよろ／＼と走り出た。

『身共ぢや』

『坂本さま』べた／＼と走りよつて、お納戸献上の帯、そつと手をかけたところである、が、ひよつと氣づく、と、十郎太、ノツソリわきに立つてゐる、お柳は、さつと氣まりの悪い思ひがして、はつとした。

『あら、逸見はん、あんた、御無事、まア』

さすがに、嬉しい顔に向けて安堵の思ひがあり／＼と額を開いた。

『はつ／＼／＼、なんのお柳さん、譯もなくかたづけただでござすわ、はつ／＼／＼』

『一人は斬り捨て、二人は美事の鴨川の眞つただなか、逸見氏、さすが、鮮かなお手のうちであつたわ』

『まア、ホ、、、、あんたはんも、見なさんしてかいな』

『鴨川べりを、うかの辻へと志す途中、思はずも、河原で浪士の斬り合ひ、見るともなしに見ると逸見氏、愉快であつたわ、はつ／＼／＼』

『あら、さう、でもあたし、新選組たら、えらい、強いといふさかいに、いかい心配しましたわいな』

『はつ／＼／＼、そうか／＼』

二人はずつと通つて、奥の間、十郎太の居間へ入つたのである。

お柳は、いそ／＼と、茶菓をもつて出る。



『あんたはん、お酒の用意しましやうかいな』  
『いや』龍馬は言下に制した。

『お柳、今日のは、さうしては居られないのだ、逸見氏、こゝにあつては危い、新選組の的ぢや、一先づ身共屋敷へ同導する』

『はい』

『もう、やがて、馬鹿どもめが、押しかけて来やうも知れぬ、逸見氏、出掛けるとしようか』

『さらば』といつて、十郎太思案顔。

『お柳どのは』

『……………』

『どうやら、新選組の手がかゝらぬともかぎらぬぢや』

『うむ、さア、女を伴ひて行くもいかゞ、お柳、そちは、あとから、身のところへ来るがよいわ』

『はい』

お柳は龍馬のそばへ行ける、思はぬことから思ひの叶つたことゝなつたのである。

『では、あとから、まゐりますわいな』

龍馬と十郎太は花屋をいで、土州屋敷の、龍馬の住居へ去つたのである。

\*

\*

\*

\*

新選組の連中は、逸見斬り捨ての手が、脆くも、一人は落命、二人は醜い敗北、命だけはたすかつたものゝ、びしよ濡れの濡れ鼠、人の見る目も恥かしい恥辱を受けたこのまゝで捨て置いては、新選組一派の勇武の名折れ、是が非でも逸見十郎太、斬つて估券をとりかへさなければならぬ、血に勇む、新選一派の荒武者ども、追つとり刀二人の濡れ鼠を先導に、たつくと乗り込んで来たのは、ざつと十人、ばらばらと花屋へ躍り込んだのである。

『やい、薩摩浪人の逸見は、どこにゐる』

殺氣走つた眼を光らせて、喚くやうに問ひかけた。



吉兵衛はびつくり仰天。

『ひやッ』と叫んで、腰べつたり、手足を藻掻で、ぶる／＼と慄えてゐる。

『浪人ものはどうした』がんとひびく破れ鐘聲。

『は／＼、はい、はい、その、いのちばかりは』

『えい、馬鹿ッ、浪人ものはどうしたといふのだ』

『はい、どこやら、出やはんして、はい、一向まだお／＼かへりありまへんがな』

『なにッ、かへらぬと、嘘を吐くとゆるさんぞ、各々、さがして見ろ』

『お』とや／＼と浪士たちは、戸障子を蹴外づして、奥へ躍り込んだ、が、逸見の

片影だにないのである。

『うーん、逃失せたな、残念』

『やい、おやじ、浪人、どこへ行つたいへ、いはぬと命がないぞ』

『はい、わしはや、ちつとも、知りまへんのや』

『知らぬと、うぬ、いわぬと叩き斬るぞ』

『うわつ、おた／＼、わし、しん、知りまへんのや、しん／＼、ちやつとも、知りまへんのや』

『え、面倒ぢや、腹癒せだ、叩き斬れ』

『お』

『ひやアッ』叫ぶ間もなく、吉兵衛の首は、ぱさり、血潮を吹いて刎ねとんだ。

『あッ、お父はん』お柳は、われをわすれて、よろ／＼と飛び出た。

『やア、おのれも』

血を好む浪士は、やにはにお柳も斬らうとした。

『しばらく／＼』かういつて飛び出したのは、大瀧馬之丞、

『やア、これは無分別』

『なぜぢや』

『敵の消息を知る唯一のてが／＼、それを失ふは策の得たものでござらぬ、まづは身共にまかせられ』



『なるほど』

『身共、しかと實を吐かせて御覽に入れる、また、一つは、龍馬の愛人、神がくしにかけて苦しみますも皮肉な復讐、こやつ、身共が、しまつつけるでござるわ』

『よし、大瀧氏、すりや、貴公にまかすわ』

『かたじけなし』馬之亟は、一かどの軍師振りである。

『やい、こやつ』馬之亟は、早速の間にあはせ、刀の下緒をとつて、お柳の手をうしるにまわして、ひし／＼と擲げてしまつた。

『不屈至極の大罪人に組する、憎いやつ、窮命させてくれる』

鹿爪らしい馬之亟の素振りである。

『身共しかとあづかり申した』

馬之亟はお柳の尻繩をとつて。

『女め、立てい』天晴れ天下のお役人振りである。

お柳は見るまへで、父は残酷たらしく殺され、氣も轉倒するばかりである、血走つ

た眼はくらむばかり、そのうへならず厭らしい馬之亟が、あられもないいましめの繩

お柳は口惜し涙に身も世もない有様である。

『やい、立てッ』お柳は動かうともしなかつた。

『えい、強情な女め』

馬之亟は、一生懸命引きたてるが、お柳は立とうともしないのである。

『こいつが〜』

馬之亟は力んで、顔を赤くしてゐる。

『なんだ大瀧、愚圖／＼してゐるな、かうするんだ』

一人の浪士がひづとお柳の襟がみをつかひと、ぐいつと引き起した、お柳はよろよると立ちあがる、と、浪士は矢庭に小脇にかゝへた。

『うゝ、なゝるほど』

馬之亟、唸つて感心してゐる。

表へ出ると、浪士はとんとお柳をおろした。



『大瀧氏、わたすぞ』

『心得た』

こんどは馬之丞、浪士の真似して、小脇へかへやうとした、が、こたわるお柳に手あまして、やつとの思ひで、突き飛ばしながら引き立てる。

ところへ、出先きよりかへつて来た、お柳の母、それと見ると、あつと驚いて、

『これまア、滅相もない、お武家さま、お柳をかへしておくれやす』

『お母はん』

お柳の母はひたとお柳に死噓みついて離さばこそ、

『やい〜、公儀御不審の女、放さぬと、きさまも一緒に引きたてるぞ』

『い〜え、放しませぬ、わしの娘、そないな、おほそれたこと、いえ、かへして〜』

母は夢中にしがみつく、馬之丞は大弱り、汗た〜、息をはづませてゐる。

『ふ〜不届きものめ、え〜、は、放しよらぬか、う〜、ここりや』

と、一人の浪士、面倒と思つたか、いきなり足をあげて、お柳の母の脾腹をとんと

蹴つた。

『う〜ん』お柳の母は、とんと倒れて氣絶した。

『わッ』お柳は、べたり泣き倒れた。

馬之丞は、大汗、どうしたらよいかと、とんと途方にくれてゐる。

『どうした大瀧』

『いやはや、とんとしまつにいかぬ』

『はつ〜、よし、手傳つてやるぞ』

馬之丞は大喜び。

『頼む〜』

『そのかはり、大瀧氏、心得てゐるだろう、それな、可愛いやつで一杯』  
浪士は、すかさず、骨折り代の要求とある。

『承知〜』

『よし』



浪士は、するくとお柳を引きかへた。

それは、馬之亟が乳母の家、寺町通りの肴屋甚作の家である、そこへ、お柳はかへ込まれたのである。

『やれ、大庭氏、御苦勞でござつた』

『美しい女を抱へての難儀は、ちよつと、乙なものでござるわ、はつくく』  
大庭は、からくと笑つた。

『ならば、さつきの御禮の一條、それにはおよばぬと仰せあるか』

『いんやア、人目の關に、身共、うんと大汗をかいわ』

『なるほど』

『あたら武士、誘拐と見らるゝのくるしさ、それももう、それ、例の可愛いやつ酌でな、ぐつと腹の底のつんとする、美味しい酒が飲みたいばかりにだ』

『抜からぬ御人だ』

馬之亟は小判を一枚、財布をしつこつとほくしてとり出した。

『大庭氏、心ばかりだ、疲れを癒やしてくだされい』

『ほう、さすが内福の大瀧氏、では、貰つて置くぞ』

大庭といはれた武士は、小判を袂へ投げ込んで、ぷいと飛び出した。

『乳母や〜』

馬之亟は、なにやら後めたい心地、こつそりと乳母を呼んだ。

『誰だい』

胡麻鹽頭の頑丈さうな婆、側戸の障子をがらりと引きあけて、ぬつと首を突き出した。

『わしや〜』

『なんだとえ、わしだとえ、わしなら、とんびの親分や、なに攫はうとてうせくさつた、そないな物騒なもん、わしきらいや』

馬之亟は、びつくり攫つたねたが露れたかと、さつとした。



「乳母や、馬之亟だ、馬之亟だ」

おとね婆アは、ちとうとい耳をかしげて、やつとわかつたらしく。

「うゝ、若様か」

「おゝ、さうや」

「うゝ、やれゝ、若様、側窓からこつそり、いつの間に、そんなことをおぼえさした、あたしまだ、坊んちのつもりであるだに、いつそ、油断がなんねい、やれゝおはいりなんしよ、若様」

「乳母や、ちやつと、きまりが悪い、裏口をあげてくれ」

「若様、そんな野暮いふたら、あかんがなア、御主人の若様をなア」

「いいよ、頼むよ」

「そうかね、やれゝ、どうしたのかね」

おとね婆ア、ひよつこり立つて、裏口の戸を、がたびしと開けた。

「若様、開けたがよ」馬之亟はもじゝ。

「乳母や、此のとほり、頼みがあるのや」馬之亟は手を摺つて見せる。

「あれまア、見つともない、おきやんせよう、おはいりなんしよ」

様子のおかしい馬之亟の氣振りに、おとね婆ア、キヨロゝ馬之亟の後をのぞいてみると、美しい女の顔。

「ほゝん、若様、もうこんなことになつたのかいなア、ほんまに、やれゝ、若いと

きにはなア、よしゝ、婆の部屋へな、若様、ござらんせ」

婆は、ずつと引つこんだ、さて、情知りな婆アである。

馬之亟はほつとして、お柳をかかへて、やつとの思ひで、婆の部屋へ抱き込んだ。

お柳はもう、ぐつたりとして力なく倒れた。

馬之亟は、すぐといましめを解いた。

が、お柳は顔を伏せて、起きやうともしなかつた、かの女は、まるで、氣抜けがしたやうである。

馬之亟がなにやら、ごとゝ喋べるが、お柳は更に耳へは入らぬやうであつた。



「若様、どうしなさんした」

引戸を半分開けて、ヌツと顔を出したおとね婆、ぐつたりとくづをれてゐる女を見  
ると、

「ほ、ん、苦勞づかれが出たのかいな、可愛相にな、とつくり休ませたがい、どす」  
馬之亟も、今日は、とても、ものにはならぬと思つて、おとね婆に、逃がさぬやう  
にたのんで、こそくと裏口から抜けさつた。

\*

\*

\*

\*

一度家へかへつた馬之亟、親父の惣右衛門の前を、鹿爪らしく、新選組の一派に力  
を貸せて、天下の大罪人、龍馬一味の剛のもの、逸見十郎太斬り捨ての一團に加はり  
て、駈せ向つたが、残念ながら、當の曲者、風を喰つて逃げ失せた、いづれは、尋ね  
出だして討ち取る所存、なんぞと、よいから加減なことをいつて、  
らしく話して聞かすれば、親馬鹿ちゃんりん、うむ、そうかく、  
來だと、惣右衛門、すつかり悦に入つて、臥床てしまつた。

あつはね、ゆし、  
にん

巧々と、親父を昇ぎあげた馬之亟、獨り、天晴れ、蘇秦の六國連衡の辯を振つた心  
地、間のよいときには、調子までよいものだ、北叟笑んで、家人の寢込むのをまつ  
て、こつそり邸を抜け出して、寺町通りへ一目散、乳母の家へ駈けつけたのである。  
手に入つた寶、ちよつとの間も、打捨りにして置くのは勿體ない、お柳の息のこも  
つた部屋の中かで、たゞ寝るだけでも嬉しいつもり、さても、しまつにをへぬ坊んち  
である。

甚作の家の前、表から叩けば、小僧か若いもの、御亭や、お嬢に出られたんでは、  
ちときまりがわるい、裏口を叩くか、ちよつと、とほりがわるいので、事大仰で、あ  
たりに憚る。

「困つたく、はて、どうしたらよいものか」

色男も、さすが、樂なものではなかつた、馬之亟、表へまはつたり、裏へまはつた  
り、とつおいつ、思案にくれるといつたありさまである、やつぱり裏口、出るのは下  
女のお玉か、巧く行けば、乳母や、さうだ、かう思つて、馬之亟は、裏口の方へ、こ



そり／＼とまわつたのである。

圖端に、がたりとする、戸口の響き、馬之亟は、びつくり、逃げ腰になつたが、びたりと雨板に添つて、小さくなつて、やうすをうかがつた。

ガチャリと鍵の外れた音、すうつと、戸が引き明けられた。

『はてな』

馬之亟は、睡を定めて見た、をかしい、人の出るやうすもない、馬之亟は、ぞつとした、まさか、物の怪でもあるまい。

すると、するりと、音もなく出た人の影、たしかに女である、戸口の柱につかまつて、ちよつと、あちこちをうかどうやうす、すつと飛んで、樋あはひへ、する／＼と消えた。

『あつ、お柳か』

馬之亟は、かう思つたが、なんとならう、おぞけが立つて、飛び込んで捕へる勇氣が出ないのであつた。

と、おとね婆の聲

『やア、誰れか来てくれ、娘が逃げた』

おとね婆アは、ばた／＼と、裏口へ駆け出した。

『戸が開いてる、金どん、忠どん、早く／＼追ひかかけてくれ』  
寝巻きのまゝの、若いものが二人、手拭ひの向う鉢巻。

『お婆ア、どつちだ、畜生』

ぐるりと尻を引んまくつて、かかりは勇みである。

馬之亟は、やつと氣強くなつた。

『乳母や／＼』

『若様かね』

『うん、お柳は、この樋あはひへ入つた』

『あれまア、ほんまに、いたちのやうな娘だね、金どん、忠どん、入つて取つつかまへておしまひよ』



『待て〜、畜生、えらいところへ入りくさつたな、待て〜』

『金どん、じめ〜した樋あはひ、暗さはくらし、薄氣味わるさにもじ〜。』

『早く〜、愚圖〜しとると、向うへ抜けてしもうかなア』

『よし来た』

金どん、氣味悪るさうに、足から先きに、てつくり〜と入り込んだ、ついで、忠どん、馬之亟といふ順である。

中に潜んでゐたお柳は、追手の入つて来たにびつくり、こそ〜と、向うへ抜けて出た、そのとき、もう、金どんは、直ぐ、あとへつゝいたのである。

お柳はやつと廣いところへ抜け出ると、ばら〜と一散に、無我夢中に駆け出した『待て〜』

金どん眞つ先きに追ひかけた、忠どん馬之亟もついでに駆け出した。なんといつても女の足、もう直きに捉へられさうになつた。

『あれ〜』

『おい、待ちなせえ』

絶對絶命、お柳は轉ぶやうに駈ける、と、どんと、誰れやらに打ち突かつたのである、誰れかも知れぬ、けれども、溺れたものは藁でも掴む、お柳は地獄に佛の心地。

『助けてくれやす』

くるりとまわつて、一人の男の後へかくれた。

『やア、どいてくれ』

金どんは、男を突き退けて、捉へやうとした。

男は、それを、とんと突きとばした。

『ならねえや』男はお柳を庇つて立つた。

『やい退け〜』

馬之亟は、武士らしく威張つて、こけ脅威しに、刀の柄に手をかけた。

『巫山戯くさるな』

男はいつの間にか持つた、下駄で、いきなり馬之亟の鼻つら、がんと喰らはした。



『あ痛たッ』馬之亟は、びしやりと平太張つた。

『われ、承知せんぞ』

金どんと忠どんが、一緒にかゝるを、横面、小鬘、ぐわんぐわんと撲られて、

『ひやッ、痛い、畜生』

金どん忠どん、泣き聲あげる、その間に男は、お柳の手をとつて、

『心配はいらない、さア』

たつ／＼と駆けて、闇に消えた。

馬之亟は鼻血のしまつに困つてゐた。

### 氣早の寅松

纏を振つては、京の利けもの、背中に彫つた龍卷に、つひ綽名も龍卷の寅松といへば、一角人に恐れられる、とにもかくにも、誓願寺の徳五郎が祕藏の乾分であつた、舳綱の文太、白狐の惣太、岩不動の權三、これが、誓願寺の四天王と呼ばれて、無頼

漢なかまには、ピンと響く顔だてであつたのだ。

それにしても、龍卷の寅松、寅が龍を背負つたのでは、年中、安堵は出来まいと、笑談まぎれにひやかすと、

『吐くない、白痴め、こちとらア、年々年中、火水のなかで暮すんだ、なア、いゝか焦熱地獄の生不動、瀧と打ち込む筒口を、ばらりと振つて屋根の上、命を的の纏持ち火の車のお迎ひを、心待ちに待つてゐるんだ、安堵なんぞとのんきなことは、おいらにや用はねえんだ、いつも龍虎の争ひで、黒雲起す纏のさき、ごうつと吹き来る火風のなかに、さつと振つたら水しぶき、荒神さまもあつたものか、びしやりと消さなや置かねえんだ、わかつたかい、ぼろくそめ』

寅松、いつも、かういつてかへすのであつた。

その日は、祇園の町、燃えるじゆばんの色に迷ふて、寅松一流の向ふ鉢巻、威勢よくしけ込んで、しつぽり振つた纏のさき、濡れてかへるの、安からぬかへり途なのであつた。



寺町どほりへかかつて来ると、思ひがけない人礫、とんと、飛び込んで来たのは美しい女、事の仔細は抜きにして、ふところのなかへ飛び込んだ鳥だ、追ひ出してやつては男がたぬ、喧嘩なら博士、馴れたものだ、腰もかゝめず、駒下駄をすつと把つて身構へてゐる、それとも知らぬ三びん侍、間拔けた顔をしてこけおどし、ちやんちやらをかしないと、ぐわんとくらわせた鼻柱、三びんめ、意口地もなく平太ばつた。で、寅公は、美しい女を、夜は更けてゐる、ともかく、自分の家へともなつて来たのである。

『おい、嬢ア、開けてくんな』

とんくくく

さすがに寅公、遊んだあとの丑満では、いくら嬢アどんでも氣兼ねがある。

とんくくく、そつと叩く、が、嬢どん、鼻から提灯、まさか、白河夜舟、よい心地と見えて、さらさつぱり音もない。

寅公、すつかり悄れてしまつたが、ちつと強く、

『おい、起きろよ、おい、嬢ア』

どんくくく。

『誰だい、愚圖六、こないに晩く、阿房らしい、明日来なんせ』

『おいく、嬢ア、おれだよく、開けてくれ、おれだよく』

『けつたいな、悪い狸や、おきやんせく、龍巻のお嬢アだよ、出なほしてお出で』

『おい、開けるい、御亭主さまのおかへりだい』

『大層な事をいひやす、ほんまに、なに血迷つて、いまつころさ、お前、開けやへんから』

『おいく、野暮をいはねえで、開けて呉れろ』

『祇園の阿魔ちよのところへ、いつたらいわ』

『畜生、ふざけねえであけるい』

『可哀相に、振られて来たやうなぼうすけなら、お断りだよ』

『やい、開けやがらねえと承知しねえから』



「アアア」

嬢どん、氣つたるさうに、欠伸をかいて、どつこいと、床を出たやうすである。

「ほんまに、しんきなおやじや」がら／＼とんと戸を開ける。

「さア、姐さん、お入りやす」

「はい」

嬢どん、眼をくる／＼、ノロ／＼と寅公の後をのぞいた。

「こう、お入りやす、遠慮にやおよびんせぬ」

「御免してお呉れやす」

つと入つた女、見れば、抜けるやうな美しい女、ほつれた鬢の毛、しどけなくはだけられた衣紋のくづれ。

嬢どん、やにはに寅公の胸へ武者振りついた。

「お前はな／＼」

慄える聲が、づんと透る。

寅公はびつくり。

「どうしたんや、白痴／＼、放せ／＼」

「えい、口惜しい、甚助野郎、うぬ、この阿魔ちよを連れ込んで、わし、追ん出す氣

だな、えい、口惜しい、畜生／＼」

「白痴／＼、なに、とてつもないこと吐くのや、えい放せ／＼、馬鹿、馬鹿やな」

「えい、放さねえ、わし、さア、出すなら出せ、えい、口惜しい、畜生／＼、こなえ

な女、連れて來よつて、わアつ、口惜しい／＼、えい畜生、阿魔、われ、よくも／＼

宅の人、だましくさつたな、えい、利かぬぞえ／＼」

寅公を小づきまわしてゐた嬢どん、こんどはお柳の方へ、凄い目を剝いた、嫉妬の焰が、むら／＼と立つた、嬢どん、夢中になつて、お柳の方へつかみかゝつて、いきなり鬢をつがんだ。

「えい、畜生、われ、よくも、わしの人を寝取つたな、畜生／＼」

「あれ／＼」



どんと、お柳は引き倒された。

『畜生、とんでもないことをしくさつて、これ』

寅公、慌て、嬢ア的首衿とつて引き離さうとするが放せばこそ。

『え、畜生甚助、助平野郎、え、阿魔め、憎や、どうしてくりよう』

『お内儀はん、勘ちがひや、あたし、なんにも知りへんえな、放して呉れやす』

『え、吐け、嘘々、うぬ、わし、追ん出す氣で來たんやる、え、憎や』

びんくと、とつた髪を引き手繰る。

『お、恐や、放さんせ、嘘や〜』

『ほんまに、え、どうしてくりよう』

『え、氣狂め、なにとんまちがへてけつかるのや』

寅松、やつとの思ひで、つかんだ髪の手をほぐして、とんと庭へ、突き倒した。

『え、口惜しい』

嬢アどん、身慄ひして泣いてゐる、子供が眼をさまして泣き出す、とんださわぎで

ある。

嬢アどん、なんと思つたか、がばと起きると、ばら〜と駈けだす。

寅公は、さすがにびつくり。

『われ、どこへゆく』

『え、でれ助、わし、これから、親分を連れて來て、さばきをつけてもらうから』

『叱かられぬやうにしろ』

『なにいつてゐるやがるのや、覚えてお出で』ばた〜と駈けさつた。

『姐さん、どうもとんだ醜いところをお目にかけて、すまねえ〜』

『いゝえ、あたしこそ、お迷惑をかけまして、しん、すみませぬ、お内儀はん、どう

なさつやろ』

『なアーに、親分のところへ行つて、いひつけてかへるんでさア』

\*

\*

\*

\*

『どうも、困つた奴等だ』



かう、門口で、口小言をいひながら入つて来たのは、親分の徳五郎、絹物のどてらに、鎖のついた下げいんでんの煙草入。

「寅公、どうしたんだ」

「へい、親分、とんだ御迷惑をかけまして、やい」

寅公は婢アをにらみつけた。

「まちねえ、いつたい、どうしたんだ、おまきどんが、大變だ親分来て呉れといふから、なんのことやらわからぬが、まア来て見たんだが、どうしたんだ」

「え、親分さんえ、この甚助がよ、ほれ、その阿魔ちよを連れくさつてさ、わし、追んだすといふのや、わし、口惜しい、え、口惜しい、わアツ」

おまきは、大仰に泣き出した。

「まア、しづかにしな」

徳五郎は、じろりとお柳の顔を見た。

「どうしたんだ、寅」

「へい」

「おまきどんのいふとほりか」

「笑談じゃありません、ほんまに、馬鹿だつて」寅公は忌々しうに婢をねめつける

「ふーんや、助平野郎がよ」

「畜生ッ、氣狂め」

「まア、しづかにしろ、深の夜中に、見つともない、大聲立て、あたり近所の迷惑になるわな、寅、いつたい、その女中はんは、どうしたのだ」

「へい、親分、寅アその」

祇園のかへりは、ちよつと、具合がわるいので、寅公、びたと口ごもつた。

「どうしたんだ」

徳五郎の聲が、ぐつとひきしまつた。

「おいらア、龍卷の寅公、親分、はばかりながら、まがつた事アしねへんで」

「うむ」



「實ア、親分のまへで、きまりが悪いが、ちやつと、祇園で遊びやして、かへり途のなかから、この人が鐵砲玉のやうに打つかつて來たんや」  
 「なるほど」

「すると、あとから、大きな野郎が三匹、追ひかけて來る、讀めてゐるまア、誘拐か手詰めか、で、わしも龍卷の寅公、糞つてわけで、三匹、下駄で撲きつけて、ともかくも、この女中を連れて來ましたのや、聞きや、十州屋敷の、坂本龍馬はんたらといふ、いゝ人のあるのに、東町奉行所與力の大瀧惣右衛門さまの息子の馬之亟さまたらが、横戀慕して、攫ひ出して、寺町通りの魚屋甚作の許へかくしたのを、逃げ出して來たのだといふはなし、まだそのうへに、可哀さうに、この人の親御さんたちや、その馬之亟の合棒の奴等のために、果敢ない最後を遂げなすつたといふはなし、親分の氣の毒なことぢやござんせんか、おいらア、泣きましたぜ」

「うーむ、そうか」

そばで聞いてゐた、婢アのおまき、話のやうすに、耳をスク〜と聳てゐるたが、

きまりがわるいやら、恥かしいやら、申し譯ないやら、氣の毒だやら、わけがわからなくなつて、わつと泣き出した。

「なに泣いてけつかるんだ」

「お前はん、かんにんしてお呉れやす、わし、すみまへん〜」

「なに、いつてやがるんだ、ぼろくそめ、姐さんを引き摺りくさつて」

「姐さん、かんにんしてお呉れやす、わし、ほんまに、申し譯ありませぬ、かんにんしてお呉れやす」

「いゝえ、あたしのために、いかい、迷惑なこと、ほんまにお内儀はん、かんにんしておくれやす」

「ほんまに、あんたさん、お氣の毒な人やな、しんきに思はずと、宅にゐなはれ、よいやうにしてあげませうから、ほんまに、わし、きまりがわるい」

「なに、いつてやがるんだ、氣狂ひづら」

「まアいゝや、寅公、恪く女房は家の寶つてな、大事にしてやれよ、はつ〜〜、



だが、おまきどん、たいがいにしなないと、世間に笑はれるよ」  
 「親分はん、どうもすみまへんえな」

「はつ／＼、姐さん、かういつたわけだ、氣の置けない人達だから、心配せんでな、わしは、誓願寺の徳五郎つてもんでおすが、また、およばずながら、なにかの力になつてもやりませう、氣を落さずになるさるがい、寅公、犬も喰はぬ喧嘩の仲裁は、あんまり無闇とさせてくれるな、はつ／＼」  
 徳五郎は、さつ／＼と歸つていつた。

「ちつ、氣狂ひめ」

「ほ／＼、濟みまへん」

「なんだい、阿房や」

なんのことだ、まるで、大風のとほつたあとの静かさである。

四條通り河原町、土州屋敷は、そこにあつた、入り口には門番の宇兵衛老人が、睡

たさうに控へてゐる。

ところへやつて来たのは龍卷の寅松、あとからお柳が恥かしさうにしたがつてゐる

「御門番、お願ひ申します」

宇兵衛老人、びこりと首をあげて、

「なんだ」

「へえ、坂本さまに、ちよつと會ひたいんで、通してお呉れやす」

「坂本さま、龍馬さまか」

「へえ」

「どこから来た」

「へえ、誓願寺のあたりにある、龍卷の寅松つてもんですが」

「龍卷の寅松、いかつい名前の奴だな、よし／＼、待つてゐる、どんな用事だ」

「坂本さまに會つて、お渡しものをせんならんによつてな」

「よし／＼」宇兵衛、ちよつと考へたが、



「それはな、これから、ずつと入つてな、左へ七軒目が坂本さまの宅だ、通れ」  
 「おほきに」

宇兵衛老人は、先きに立つて、ノツソリくと立つたのが七軒目の宅。

「坂本さま〜」

「お〜」

「おい、なんだつけな、うゝ、龍卷の寅松つてものが、面會に來ましたよ」

「おう」

龍馬は、やおら立ち出たやうす、玄關の戸がすつと開く、お柳は憎えたやうに、か  
 げへ身を寄せた。

「お前か」

「へえ」

「なに用か」

「お渡し申す人がありまして」

「渡す人、はてな」

「こう、姐さん」

龍馬は不審さうに、のびあがつてのぞいた。

「龍馬さま、柳どすえな」

「おう、お柳か」

龍馬は目をぼちつかせて、寅松の顔とお柳を、不審さうに見た。

お柳は、はた〜と小走りに上り框のところへ、べたり伏して、龍馬の足下で、よ  
 よと泣き出した。

「どうしたのだ、待つてゐたぞ」

「はい、龍馬さま、あんたはんの出なはつてから、新選組たらの人達が暴れ込み、  
 あたしの父さんも、母さんも、殺されましたわいな」

かういつて、よ〜と泣くのである。

「なにッ、それぢや、父さんも母さんも、う〜む」



さすがに龍馬も呆然として、言葉もない。

「聞きや、ほんまに、お可哀さうなこつてすわなア」  
寅松も、氣の毒さうに、眼をしばたいた。

「お柳、はなしはあとできく、まア、あがつたがよい、寅松とやら、世話であつたのう、聞きたいこともある、まづは、あがつてお呉れ」

「へえいほんなら、眞つ平御免やす」

部屋のなかには十郎太、我儘の大あくらへ、臂を張つてゐた。

「へえ」寅松が、お叩頭をする。

「よか」横柄な、無作法な男である、が、笑つた顔に愛嬌がある。

「お柳さんか」

「逸見さま」

なにつけても、お柳は先きだつものは涙である。

「聞いた、親御どんが殺されたげな、おいどんな、覚えとく」

十郎太、お柳のいたましいやうすを見ると、しほらしくも、涙をたへてゐる。

お柳は泣きながら、その夜の出来事のやうすを、落ちもなく物語つた、そして、寅松は寺町通りで、はしなくもお柳を助けたことを話した。

聞く事もく、意外なことばかりであつた、たつた一夜、その一夜のあひだに、かような波瀾に充ちた、悲劇の場面が展開されたとは、まるで夢のやうな事實である、龍馬も十郎太も、たゞ、吐息をついて、端倪しがたい運命の變轉に驚かざるを得なかつたのである。

で、龍馬も悲哀の感に迫りながらも、これは、もと、勤王佐幕の軋轢から來たのである、どうか、禁裏さまのために犠牲になつたと思つて、あきらめてくれと、お柳を慰めるのであつた。

寅松は耳をかたむけて、龍馬の勤王論を聞いてゐたが、はたと膝を打つた。

「なるほどなア、豪いもんや、わしら、はっきりながら、天朝さまのお膝もとを護つてゐる火消組や、公方さまがなんだ、天朝さまにたてつくなんて、そないな道理ある



もんかな、新選組たらなんたら、ほんまに 町きつぶしてやりたい』  
 寅公は、憤氣になつて憤るのであつた。

『うむ、さうだ、そうなくてはならぬ、苟しくも、日本の民は、御親とも立つべきお方は、上御一人より外にはないのだ、寅松とやら、お身たちの仲間には、骨がある氣ぢや、萬に一のこのあつた場合には、天朝さまのおために、つくすやうにしてくれい』

『ようおすとも、だれが、關東の奴なんぞに組するもんですか、そんな奴が、一匹でもあつたら、わし肯かないから』

『そうぢや、その意氣ぢや、それでこそ、日本の國民といふものだ』

寅公は、これから、すつかり勤王論者になつてしまつた。

そこで龍馬も、上屋敷のなかに女を置くことは、ちよつと、心苦しい事でもあつたので、竹を割つたやうな、龍卷の寅松の氣性に、つひ、お柳を、寅松の家にあづけることにした、そして、話しのやうすでは、母親の方は、當身を喰つたものらしいか

ら、直ぐと鹽釜町の花屋の方へ顔を出してくるやうに頼んだのである。

寅松が鹽釜町をたづねて見ると、龍馬のいつたやうに母親は無事をつた、が、夫を失ひ、娘に生きわかれた母親は、悲歎にくれてゐたのであつた。

花屋は、なにほどの資産があるわけでなし、ほんとに、吉兵衛に死なれては、活計の道にも、ちよつと困るほどなのであつた。

それやこれやで、お柳の母は、もう、狂せんばかりであつたのである、あたりの人達の、同情のある慰めも、耳に入らず、たゞ泣き明かしてゐるのであつた。

そこへ、寅松が尋ねていつたのである、お柳の母の喜びはどんなであつたであらう『龍卷の親分はん、有難う、有難うおす、柱と頼む吉兵衛どんに死なれ、その上ならず、娘まで失うてしもうたかと思ふと、しん、生きてゐる心地がおませなんだに、親方はん、有難うおす』

娘が龍卷の手にあると聞いて、もう、お柳の母は躍るばかりの喜びであつた。

『それについぢや、お母アはん、わし、坂本さまからも頼まれたんだが、どうだね、』



このところを引さあげて、わしのところへ來なはつては』

『えゝもう、吉兵衛に死なれては、あたしたち母子、商賣をするにも、女ばかり、どうして、かうしてとも、算段もつきませぬ、親方はん、よいやうにお願ひ申します』  
かういつたやうなわけで、お柳母子さ、寅松の處へ厄介になることになつたのである、勿論、龍馬の方から、いくぶんの手當でもある、が、龍卷の寅松、そんなことは當てにする男でもなかつたのである、かれは、心からお柳母子の境遇に同情し、また坂本の勤王論に敬伏したので、うんと身を入れたのであつた。

\* \* \*

『おい、兄弟、世の中がやかましくなつて來たな』

『うん、そうだな、なんでも、一日に一度生血を刀に塗らなきや、氣がおさまらんちう、新選組たらいふ武士たちが、百人ばかり入り込んだつて話だが、ほんまに豪いこつたな』

『昨日も、芝御殿前で、なんでも浪人ものが三人斬られたつて話しだぜ』

『隊長は、近藤勇たらいふが、日本ぢや、このくれないな豪傑はねいつてこつた』

『ほうかいな、そないな恐い奴がノタクツて歩きよるんぢや、うかく〜わし等も歩けんもんなア』

『ほうだよ、そないな、恐い奴に、うかと出會つて、首ちよん切られたら、あかせんものなア』

誓願寺の徳五郎の部屋に、ごろん〜として、冷飯をくつてゐる、若いものたち、このごろの世間の噂さをしてゐると、いきなり、うしろから、か〜んと拳骨を喰はせたものがある。

『あ痛ッ、豪いことをしくさつて、誰だい』

頭を抱へた若いものたち、顔を赤くしてふりかへつて見ると、そこには、龍卷の寅松が、痲癩筋を立て、突つたつてゐる。

『龍卷の兄哥ぢやないか、ひどいなア、いきなりわし等の頭を撲つて』  
『なにいつてけつかるんだ、意氣地なしめ』



『おやく、頭を撲られたり、文句をいはれたんぢや、間尺にあはねえや』

『ふざけるな、手前ちのやうな蛆虫どもは、くたばつてしまえ』

『豪う、風向きがわるいな、兄哥、いつたい、どうしたんや』

『どうしたも、かうしたも、手前ちにや、禁裏さまの尊いことを知らねえのか』

『笑はせらア、禁裏さまたら、天皇さまのことやる、神様ぢやないかい、尊いも、尊とくないも、きまつてらア』

『尊いつてことを知つてゐるのか』

『そうや、わしら、見たら、目が潰れるくらいに思つてるのやないか』

『ほんなら、なんだつて、關東の奴等を褒める』

『うんにや、噂さだけだ』

『意氣地なしめ、あないな奴等、禁裏さまのかたきや、見付けたら、撲き殺せ』

『……………』

『ほんまに、あいつらア、禁裏さまづきの、いゝ人達を、斬りにうせたのや、あない

な奴等、褒めくさつたら、わし、承知せんぞ』

『……………』

『おい、龍卷、なにをがみ、いふとる』

そのとき、かういつて聲かけたのは、船綱の文太である。

『文太兄哥か、わしなア、腹がたつ、こいつら關東から來たちう、ほら、いま噂さの  
高い、新選組たらいふ浪人どもな、あいつらのこと、褒めくさつてけつかるもん』

『いゝぢやないか』

『われも、そないなこといふか』

『おい、龍卷、そないに憤怒らなくてもいゝやないか、はつ、はつ』

船綱の文太は、からりと笑つた。

『われ、阿房や、われ知つとるか、いま、天朝さまと、公方さまと、仲割れなこと』

『うむ』

『ほしたら、なぜ、われ、天朝さまへつかぬ』



「だつて、龍卷の兄哥、わし等、公方さまのお支配を受けとる家來やないかい」

「阿房ッ」

氣早の寅松は、いきなり、文太の頭をばかりなぐつた。

「われ、撲つたな、わし肯かん」

文太は、いきなり、寅松を掴まうとした。

なんでも、この文太は、大力男で、大船の舳綱をとつて、一人で手繰り寄せたといふ強力、いくら龍卷でも寅公でも、つかまへられたら往生である。

素早い寅松は、矢庭に、火鉢をとつて、とんと文太に投げつけた、肩のところへ當つて、ぼうつと灰神樂があがつた。

「え、畜生、あゝぶう」

文太の強力も、目から鼻から口まで灰だらけ、

「野郎ッ」

齋口を持ち出した寅松は、文太の腦天叩き碎かうと振りあげた。

そのとき、奥にゐた徳五郎、どうやら表部屋が騒々しいので、来て見るとこのしまつ、驚いて、寅公の齋口をうしろから、しつかりと掴んだ。

「待てッ、寅公、どうしたんだ」

「え、文太の野郎、ふざけやがつて」

「どうしたんだ」

「わし、腹がたつてたまらねえ」

やつと、目をぱち／＼開けた文太は寅松を認めると、

「野郎ッ」とつかみかゝろうとする。

「なにをッ」寅松は、齋口をとりなほした。

「まア待て、どつちも待て、文太も待て、わしがさばきをつけるさかいに、待て」  
温順な文太は、親分のことばに、不承／＼に、しづまつた。

「寅、てめいは、いつたい、氣が早すぎる、どうしたんだ、いへ、筋がたゝなきや、

寅、文太のてまへ、わしが承知せんぞ」



「だつて、親分、文太ア、天朝さまより、公方さまが大事と吐くから」  
「ふーん」

徳五郎は、小首をかしげた、こいつはちよつと、妙なことから争ひはじめたと思つたのである。

「文太、そうか」

「親分、聞いて呉れやす、かういふのや、なんでも、若いものたちが、近頃噂の新聞組たらのこと、褒めたゝら、どうたらで、寅公が、がんく怒つてゐるのや、で、わし仲分すると、われ、天朝さまへなぜつかぬといふさかいに、わし、公方さまの支配を受けとる家来やないかといふたら、いきなり、わしの頭を撲つたのや」

「ふひ、寅、てめい、なんだつて、そんなことぐれいで、文太を撲つ」

「ほれぢや、親分、わし、わるいといひなはるか」

「そうや」

「なんたら老るくや」

「なんだと」

「考へて見なはるがい、公方さま、天朝さまの家来やないか、それなのに、公方さま、御主君さまの天朝さまを、まると、屋根は漏り、疊は破れ、三度くのお食事さへ、お満足なものをお召しになれねえやうにしておいて、おのれは、贅澤三味、仕度放題、妾てかけ、天下さまで候と、金づくめの御殿に、金欄につままれてゐる、そんな法があるかい、親分、考へて見たつてわからあな、お公卿さまはどうだ、丸あんどんに燈心を搔いて、寒い日にも、提灯はりや、花簪、いろんなお内職に、指先きから血を滲ませて、おめでなさる、聞くだけでも、おらア、涙がこぼれらア、親分、それでいゝものかよう、それだから、諸國の勤王のお武士はんたちが、天朝さまを、天朝さまらしくしたいといふので、一生懸命、命がけで心配してござらつしやる、それを公方さまつきの新選組たらの暴れものが入りこんで、そないな立派なお武士はんたちを斬つて捨てる、ほんな、非道なことがあるかよ、親分」

「……………」



「わし、天朝さまへつかぬやつ見ると、腹が立つ」

「うん、寅松、道理はわかつた」

「うーん、嬉しいや、おれの親分ほどあらア」

「ふざけるな、寅松、てめへ、いつたい、そないな意見を、誰れから聞いた」

「土州藩の坂本龍馬さまから聞きました」

「そうか、寅松、一度、その龍馬さまに會はせて呉れないか」

「ようおすとも」

「もつと、よくお話しを聞いて見たい」

「文太、寅の野郎、天朝さまに逆上つてゐるんだ、まア我慢してやれ」

「……………」

「おい、文太兄哥、わし、わるかつた、かんにんして呉れやす、頼むよ、わるい氣はないんだからの、あやまる〜」

寅松、手を突いて詫びてゐる、文太も、かういはれて見ると、氣性も知れてゐる寅

松、かんにんしないといふわけにもゆかない、撲たれ損の仲なほりで、けりがついたのである。

### 志士の助太刀

「お柳さん、こんど、逸見さんが、親分のとこへきますぜ」

龍巻の寅公は出し抜けにかういつて、お柳にはなすのであつた。

「まア、どうしてかいな」

「ほうれ、逸見さんは、大層腕がお出来なさるやろ、だから、誓願寺の親分が、旦那に御願ひしてよ、若いものたちに劍術を教へていた〜といふ事になつたのさ」

「ほう、さうかえな」

「わし等もなア、旦那から一つ、ウンと仕込んでもらつて、いざ鎌倉といふときにはそれ、天朝さまのためにはたらくのや」

「おう、そのやうなこと、龍馬さまに聞かせたら、どのやうにかお喜びなさるやら」



『うんそうだね、なんでも、龍馬さまは、日本の人民は、みんな、そんな風にならなくちやならんといはしやつたよ』

『そうどすえな、でも、天に二つの日がないとおなじに、御主君さまは、禁裏さま御一人だとえな』

『ちがひない、さうや、わし等聞いても、それにちげいねえや、ほんまに、わし等、いざといへや、命を天朝さまに捧げるんだ』

『おほ、一人でも、そのやうな人が殖えたなら、龍馬さま、御満足どすえな』

『さうどすかな、それにしても、新選組たらの奴等、巾を利かせやがつて、わし等、腹が立つてなりよらん』

『……………』

お柳は、新選組と聞いて、急に沈んだやうになつて、黙りこくつてしまつた。

『うむ、ちげへねえ、むりやおへんや』寅公も感心したやうに考へこんだ。

女の胸にも、刻りつけられた恨は残る、去りし夜の惨劇、父の横死がまざくと眼

の前へ浮んで来る、家の没落、一家の悲境、さう考へてくると、復讐の一念が込みあげてくる、が、女の身、どうすることも出来ないと思ふと、復讐の念は、たゞ憎悪の念ばかりとなる、そして、それもまた、一片の涙となつて流れ落つるよりせん方もないことであつた、そして、あの夜の當の仇、誰れといふこともわからない、踏み込んだ暴れもの、無茶苦茶な騒ぎのなか、尋ねるにも術もないことであつた、だが、父の横死のもととはいへば、大瀧馬之丞、この場合、當の相手は、この男を目指すの外はない、せめては、この男だけでも討つて、父の妄執をはらしたい、と考へても、劍持つことも知らぬ身の、およばぬことである、それは、龍馬に頼めば、仇を討つてももらへる、が、龍馬さまは大事のある身、軽る／＼しくは出来ない、ことには、馬之丞が下手人といふでもなし、誰れとも知らぬ、荒武者の、新選組の手のもの、そば杖くつた不運の恨みのやりばも、的のない矢とおなじことである、仇が知れたら、機會もあらば、龍馬とても、他人ごと、は思つてはるぬ、なれども、東奔西走の身の上、お柳は、心を燃やしても、涙の雫で、打ち消してゐるよりしかたがないのであつた。



「あたし、劍術がならひたい」

恨みの一太刀、それは、自分の手で恨んでやらねばならぬのである、浅い恨みは、日につれて消えてゆく、だが、深い恨みは、日を追ふて濃くなる、お柳は仇を思ふとこのごろは身の挫しられるやうな氣がするのである。

「習ひなせえ、逸見さんが、親分のところへ來れば、てうどい」

「そらどすえ、あたし習うわ」

「あんたが、その氣なら、龍卷だ、きつと、當の仇を嗅ぎ出してやりますよ」

「親方、頼みやすえ」

「いゝとも、勇ましいや、仇討となれア、わし、助太刀や、えゝ、劍術を覺えるにも身が入らア、威勢がいゝな」

義に勇む人、あゝされど、名に殉ずる、それも人生の美である、たしかに、人生の美にさうるない。

\*

\*

\*

\*

誓願寺の徳五郎のところへ、劍術の指南に頼まれた逸見十郎太、まづもつて、就職口に當りついたやうなもの、とにかく、冷飯から抜け出して、二の膳づきの夕餉の銚子、大威張なものである、こゝ、十郎太、ちと有卦に入つたといふべきである。晝は、若いものたちに稽古をつける、十郎太、竹刀の音は大好きなり、退屈しのぎ腹ごなし、よい役である。

「さア、どんく打ち込んで來い」

寅松は大熱心、車輪になつて稽古をする、ときく負けぬ氣になつて、

「なにツ糞ツ」と力味かへる。

「なんだ貴様、なにツ糞ツといふ掛け聲はないぞ、やめるく、武士らしく、えいッやッ、氣合をかけるんだ」

「なるほど、先生、御免なさい」が、ときくはづんで、糞ツとやる。

「そらら、また出た、こんどやると、そのたびごとに、一本づつ、お面をくらはすぞ」

「へい〜どうも」



『さうら来い』十郎太が、軽くかける、が、軽くつても竹刀のなかでは、びり／＼と身がすくまる、寅公、憤氣になつて仕掛るが、氣がいらだつばかりで、空、手も足も出ないのである。

『そうれ、うつて来い』

十郎太が、すつと、竹刀を外らす。

『やッ』寅公が打ち込む、びんと受けとめて十郎太。

『つゞいて打ち込め』

ぼん／＼／＼、無茶に打ち込む、竹刀の音ばかりで、一向打てない、寅公へどもどになつて喘々息、よろ／＼とよろめくところを、十郎太、ぱうんとお面を一本。『參つた』寅公、どたりと腰を潰してしまつた。

『もう一本来い』

『やア先生、目が回ひさうどす』

寅公、ぐた／＼になつて引つ込んだ、つゞいて、四天王、かはり／＼に稽古をつけ

てもらう、さうして、お柳もそのなかへ入つて、稽古をつけてもらうのであつた。

十郎太、お柳には、とくに氣込んで稽古をつけた、女の身には、どうしても、入身の工夫が第一である、それは女には長劍は向かないのである、脇差か短刀が適している、したがつて、短い武器には、入身になつて打つ外に勝利はないのである、十郎太は教へながらも工夫して、入身の法を教へたのである、で、このごろは、お柳は大分と入身がうまくなつた、一念の力、上達も、さすが早いのであつた。

『どうだ岩不動、一番、お柳さんと、一本立ち會つて見ろ』

ある日、十郎太はかういつた。

岩不動の権三は、お柳とたちあつた。

権三は、負けぬ氣で、たかが女と、嵩にかゝつて、ぼん／＼打ち込んで来る、お柳は巧みにはねのけ／＼、えいツと躍り込んで、胴へさつと打ち込んだ。

権三、あんなに激しく隙間なく打ち込んでゐるのに、どうして胴をとられたかと、呆氣にとられてゐる。



「こいつア、豪え」権三、ひたと呆れてゐる。

「なんでい、手前えが抜けてるんだ」白狐の惣太が半疊を入れる。

「ならア、手前、一本やつて見る」

「よし、お柳さん、一本頼みますせ」

こんどは、白狐の惣太、ねつちりと、念入りに構へてゐる。

「惣太の野郎、すくんでゐるぞ」惣太は一生懸命、油断をすまいと氣を配つてゐる。

「え、ッ」素早く、お柳の竹刀がお面へ飛んだ。

「お、ッ」と惣太が美事に受けとめた。

「やッ」お面へ行つた空太刀は、すつと身を沈ませると、お胸へさつと打ち込んだ。

「參つた」

「白狐、どうした、あんまりあつけないぜ」

「うん、あんまり素早いや」

「泣言いふない、阿房や」

「敵はぬ、く」

「わつはつ、く、く」

十郎太は、心地よさうにからくくと笑つた。

\*

\*

\*

\*

灯の影が、ほんのりと鴨川の流に映つて、音もなくすべる屋形舟も、祇園の夜の

情緒をそゝる。

吊るされた提灯も、さんざめく廓の宵、女郎衆の肩を滑べるうちかけの下、冶郎の

心の燃ゆるも道理、天くだつた辨財天、物言ふ口は丹花と燃えて、ぞつと染み込む秋

波のひらめき、魂も消し飛んで、宇宙天に舞ひあがる、こゝ、極樂の巷である。

濃い茶に染め抜いた暖簾の吉野、ほどよい客を待つも奥床かし、ゆかりの女、いや

不見轉に、煩惱即是佛、功德の多いものである。

ふらりと、野簾を煽つて、ノツコリくと、つゞいたお客は、べて五人。

「おや、親方はんたち、お出でやす」



さてこそ、顔馴染のものに見える。

『吉野山吹足曳立田、薄雲大夫と全盛どころ、五人揃ふてかけてくれ』

『ほ、そないな全盛あるかいな』

『うふそうか、なければ天引一割負けておかう、ほどよいところで、帮間末社、ぞろりと揃へて呼んでくれ、俺れの在所は越路がた、黄金花さく佐渡が島、金のなる木を庭に植ゑて、榊ではかつて箕ではこぶ、寶の出船も揃ふてあるんだ』

『まア、大層な景氣ね』

『紀伊の國やも糞をくらひ、仙臺さまも振られ果報、果報くらへば手管の秘傳、はばかりながら、龍巻の寅松たア、おれのことた』

『さてそのつぎにひかへては、なにもいさごさ白浪の、五人男といひてえが、四人と顔を鴨川の、水でさらした男づれ、誓願寺の四人男、四天王の一人と、どうやら綽名も岩不動、権三といはれるケチな野郎さ』

『人まねらしく、名乗つて通るもおこがましいが、唐もろこしから三國を、跨になす』

の白狐、戀にやゆかりの惣稼ぢやねえが、知るほどの人にや、ちつとア知られた、白狐の惣太よ』

『さて、殿に控へたは、轟く浪に八幡船、海賊船と、悪いうき名を立て川の、橋の上での勢揃ひ、吐いた氣焔もケチ臭ひ、あと白浪の悪どもは、舳綱とつて金輪際、じたばたさせねえ文太でござんす』

『ホ、ツ、まア豪い氣焔や、そこなお武家はん、あんたはんも、なんぞえ、氣焔を聞かしておくれやす』

つゞいた十郎太、これには面くらつてしまつたのである。

『先生、つきあいにつ頼みやす』

『おいどんな、困るわ』

『だつて先生、あとへ引くのは卑怯や』

『よか〜』

十郎太、やけに、出まかせにはたきつけた。



「遠からんものは音にも聞け、近くば寄つて目にも見よ」十郎太、こゝまで来たが、はたとつまつた、さてなんといつてよいものか見當がつかなくなつた。

「ほう、大きい〜」四人は笑つた。

十郎太はまごご、やつとの思ひで吐き出した。

「吉野の櫻や、喜瀬川の、名花を手折る義盛の、向ふを張つて大磯の、虎となじみの

十郎太」

なんの事やら、さつぱりわからぬ、十郎太は大汗をく〜である。

一同は、どつと笑つた。

「曾我の十郎祐成さまどすえな」女どもは、どつと笑ひこけた。

「わつはつ〜」

十郎太も、仕方がないから、ごまかしの大笑ひでごまかしたのである。

\*

\*

\*

\*

十郎太の隣りの坐敷に、一組の客がある、壁にしきられてやうすはわからぬが、四

五人連れ、飲んでゐるのか、飲まずにゐるのか、ひつそりかんとしてゐる、とき〜  
笑ひの聲が立つ、あとはひつそり、妙な客人である。

搜りこゝろのある白狐の権三は、びよいと坐を外づして、廁へ立つた、そして、そ  
うつと、となり坐敷の障子際にきゝ耳を聳てた。

なかの連中は、それとも知らず、小聲ではなし合つてゐる。

「山田、あのときおやじをやつたのは貴公だつたな」

「うん、俺だ、だが可哀さうだつたよ」

「構ふもんかい、蛆虫を潰したもおなじことだ」

「それはまア、そんなものさ」権三の眼は、びかりと光つた。

「なんだと、人間一人の命を、蛆虫と一緒にしてけつかる」

なほも息を殺して聞いてゐる。

「大瀧氏、貴公、あたら玉を逃がすなんて、氣がきかなすぎるぞ、それこそ玉なしな  
はなしだわ」



「いやまつたく、つひその逃げられた、だによつてな、貴公等の力を借りたいといふのや」

「ふむ」

「女な」

「うむ、龍馬の情婦か」

「うむ、そうや、あの女な、誓願寺の、龍卷の寅公の宅にゐるのや」

「ふーむ」

「わしな、しかと見届けた、わし、どうもな、あの女、思ひきれん、ほしてな、あれ坂本の情婦やけに、武士の意地によつてな、是非、貴公等の腕を借りたい、御禮は存分にする」

「ふーん、よかるう、なア、泉、大川」

「さア、御同様に、瘦浪人でな、隊長からの手當でだけでは、とんとうまい酒ものめないんだからな」

浪士のやつら、さもしく遠ねじをかける。

「心得とるく、各々、骨折り代はあととして、當座の心づけ」

さらくと黄判の音がちやらつく。

「ふ、なるほどく、大瀧氏、わかつてゐるな」

白狐の權三、びつくりした、兄弟分の龍卷の身にかゝつた話だ。

「明けがたがよからう、まア、それまで、ゆつくりと英氣を養つておくんだ」

「よろし」權三は、くるりと身をかへして、すうつと氣とられぬやうに坐へかへつた

「龍卷」權三は、そり聲である。

「なんだ」

「静かにしねえ」權三は手をあげて制した。

「お柳の仇敵がわかつたぞ」

「なにッ」寅公、氣早やに手拭いをつかんだ。

「あはてるなよ、しづかにしな」



『山田つて奴だ』

『ふん』

権三は、いま立ち聞きしたやうすをはなした。

十郎太は無論、刀をつかんだ、が、さすが考へた、お柳に一太刀恨ませなくては、仇討ちにもなれぬ。

『よし、歸りを待ち伏せて討ちとらう、寅松、お前はすぐと宅へかへつて、お柳さんを連れて来い、きやつら、鴨川縁をつたつて行くに相違ない、河原でやる、慌てないでな、明け方といひや、まだあひがある、すつかり支度をさせてな』

『ほい来た』龍卷の寅松、こそくと立ち去つた。

となり坐敷は、どつと陽氣に騒ぎはじめた。

\* \* \*

とあるお邸の塀に添ふて、一團の黒い影が動いた、それはお柳の仇討ちの一組である、川風がそよくと吹いて、堤の柳が、ゆらりとゆるぐ、二十日過ぎ、下弦の月

は、晴れた空に、かつきりとかゝつて、思ひくの屋並の不均勢が、いとも風致よく浮び出るのであつた。

お柳は、仇討ちとはいふものゝ、女氣、胸はわくわく、張りつめても、足のふるえはかすかにつたはるのである、けれども、十郎太は、つき添ひで、頑として、太平無事な顔である、それを見ると、お柳も氣丈夫になるのであつた。

(振り冠る太刀の下こそ地獄なれ、一足すゝめあとは極樂)

十郎太は、誰れにいふともなく口すざんだ。

そのとき、かなたから、すたくと来る一群の人がある。

一同は、ざわくと動揺めいた。

四天王のものはびたりと塀にくつゝいた、十郎太とお柳はその前へびたりと立つた一群の人達は近づいた。

月夜の河原、かくれても、近づくまゝに、姿はありく。

が、さきの一群、不敵のものども、こちらの一團を目にもかけぬ、ぬらりと通り



すぎやうとする。

十郎太は、ぱつと、一群の行く手へ、大手を擴げて突つたつた、お柳も思はずた、つと二足ばかり、すゝんで立ちとまつた、袖を絞つてたすきがけ、島田の根を、きりりと鉢巻で巻いた、足には脚半、足袋はだし、もろ手は刀の鞘と柄、もう恐れ氣も見えなかつた。

『待てッ』と、十郎太の一聲。

『なんだ』

『五條通り鹽釜町、花屋吉兵衛の娘、お柳、父の讐を討つために待ち伏せた、山田とやらいふ浪士、潔よく、名乗つて勝負せい』

浪士たちは顔見あはせて呆れてゐる、これから誘拐に行かうと思ふ當の本人が待ち伏せて、仇討ちよばはりをするのである。

『ちようどいゝ、それ』

『おゝ』浪士達は、さつと抜きつれた。

四天王の面々、さつと走つて、浪士のうしろへまはつて、十郎太と敵をはさんだ。

『あつはつ／＼／＼、さて／＼武士の作法を知らぬ奴等だ、仇討名乗りがかへせぬとは、新選組の名打れとならう、それでもよかつ』

さすがに浪士たちにも、名は大事だ。

一人の武士が、つか／＼と進み出た。

『身共、新選組の山田宇之平、花屋の娘お柳、仇討ちとは殊勝らしい、いかにも、身共が、お身の父を手にかけた、だが、女がてらに敵呼ばはり、しやらくさい、氣の毒だが返り討ちにする、さア、まるれ』

お柳は、ぶる／＼と身をふるはして、つか／＼と進み出た。

『いふな山田宇之平、よくも罪ない、あたしの父さんを殺したな、恨みの一刀、覺悟しや』

すつと抜くとひたり青眼。

『ふゝん』山田は、チリ／＼と詰めよつた。



みなは、こゝ見物といつたかたち、手に汗を握つて見てゐる、が、大役は十郎太、油断なく見はつてゐる。

お柳は、氣だけは張りつめて逸るけれども、腕が違ふ、チリ／＼と後へさがると、山田は透を見たか、いきなり打ち込まうとしたとき、十郎太は、

「死ねッ」と聲かけた。

山田の太刀は、十郎太の聲に慄えて、太刀先きが狂つた、と同時に、「えッ」といふお柳の鋭い叫び聲がした。

「ワッ」山田は、みぞおちのあたりを、背へ透して、突き刺されて、どたり倒れた。

「美事、お柳どの、とゞめを」

「父の仇、思ひ知れ」

お柳が、づぶり、とゞめを刺す、そのとき、浪士たちは、刀を振りかむつて、十郎太に斬つてかゝつた。

「朋友の仇、うぬ覺悟をしる」

「なにをッ」

十郎太、三尺の強刀、すらりと抜くと、すつと水車に切り拂つて、さつと構へた。

大瀧馬之丞、このていを見ると、こそ／＼と逃げ出した。

「それ、みんな、そやつ、逃がすな、生け捕れ」

「おゝ」

ばら／＼と追ひかけた、寅松と文太、たちまち馬之丞を文太がつかんで叩きつけた寅公が手早く手拭で両手をしばりあげた。

白狐と、岩不動は、十郎太に加勢しようとしたが、十郎太はとめた。

「危い、見て居る、大事ないわ」

一人に三人、呼吸をはかつて、攻めあうてゐる。

十郎太が、三尺餘りの長劍は、鐵塔の如く聳えてゐる、浪士たちも迂濶には飛び込めぬのである、が、大勢を頼み、なかの一人が、「えッ」と一聲、斬り込んだ、十郎太、ぱちん受けとめる、とたんに、わきの一人が「ヤッ」と斬りつけた、十郎太は、ぱ



つと飛び退きさまに、前の一人をすぱり胴斬りにして、かへす刀で、側の一人、脳天から斬り下げた。

『わッ』と倒れる。

『おのれッ』残る一人は必死の太刀、鋭く斬り込んだ。

ばちん、十郎太が受けとめると、太刀は、ぐつとからんで、鋸せり合ひになつた。

しばしの間は、たゞ、『えい、おい』といふ互のかけ聲ばかりである。

四天王のものたちは、十郎太の働きに、恐れ入つて、あつといつたまゝ、寝めことばも出ないくらゐである、お柳は、もう、がっかり、べたりと坐つてゐる、馬之丞はがたく、どうなることかと慄えてゐる。

すると、『えいッ』といふ十郎太の鋭い叫びがしたと思ふと、浪人は、たッとうしるへよろめいた。

『やッ』すぱり、浪人は車斬りにされて、どたり落ちた。

『先生、お芽出度う、お柳さん、お芽出度うございます』

『おかげさまで、先生、おほきにありがたうございました』

お柳は、つい、はらくと泣いた。

『お柳どの、それ、まだ敵の片割れ、いや張本人だ、斬つてしまへ』

『ひやッ、どうぞ、ごかんべん、ご、ごかんべん』

『お柳どの、早く』

『はい』お柳は血刀をとつて、つかくとすゝんだ。

『わアッ、おいお柳どの、か、かんにんして、か、か、かんにんして、わアッ』

馬之丞泣き出してしまつた。

『えい、いふな、馬之丞、よくも度々あたしを苛酷い目にあはせたな、父の殺されたも、もとはといへば、そなたのしごと、覺悟おし』

『わッ、人殺し』

馬之丞、ひよいと立つて逃げやうとするところを、肩さきから、さつと、お柳に斬り付けられて、『わッ』とさげんで、どたり仆れた。



『いまこそ、思ひ知れ』

ずぶりと、とゞめ、馬之亟は、ばたくと足を慄るはして絆ぎれた。

『いや、芽出度い〜』

『これも先生のおかげでございます』

### 半鐘亂打

紫の雲はたなびけども、禁裏の松、常盤の色の緑も淡く、腿せて見える、幕末の雲の上、誰れか、一掬の涙なしに居られやう、實に高山正之が、橋の上に落した涙こそ國民の奥底の血の本然の現はれであつた、が、されど、淡い色、腿せたとは見えるもの、若芽の緑、いま新らしく吹き出でたと知るなれば、やがて緑濃き、常盤の色も深みますは當然、いまが黄氣の立ちそめた、世は黎明期と見れば、幸すくなからぬ心地もする。

禁裏御所、日の御門外、こゝ一たいの公卿町、殿造、四ツ足門、雨風に洒されて、



(2) 巻の團亂



見るかげもなしとはいふものゝ、平安朝、古雅な建築のおもかげは、さすが、古のしのばれる、とうとげな感じをあとふるのであつた。

いま三條家の御門外へ、ゆつたりと出て来た三人の武士、一人は、大兵肥満、一人は爽颯、一人はがつしりと落ち付いた武士であつた。

いづれも、なにやら、ほつとしたやうな、一抹、晴れたやうな氣色である。

とある辻へ來ると、がつしりと落ちついた武士が、はたと立ちとまつた。

『御兩所』かういつて、他の二人に聲かけた。

二人は屹と振りかへる。

『拙者は、これにて失禮いたす』

『後藤氏、御苦勞でござつた』

『ともあれ、薩長土聯合も首尾よく調ひ、上宸襟を安んずる、我々の宿志の實現する期も遠くもござるまい、これも坂本氏、貴殿の力、あづかつて大なり、多謝申す』  
『いや、坂本ごとき微力が、なんの力とならう、これみな偏に、勤王志士、誠忠のい



たすところ、また、貴殿並に、西郷氏誠忠のたまものでござる」

『さらば、西郷氏』

『後藤氏、たのみ申す』

わかれた武士は長州の俊傑、後藤象次郎、また他の二人は幕末の大人物、薩州の西郷吉之助、それに維新の奇傑、坂本龍馬の三人であつた。

かれらは、今日、三人うちつれて、三條右大臣卿實美朝臣の邸へ伺候して、天下の大勢、勤王志士の情勢、薩長土聯合のこと奏聞を乞ふて、優渥なる右大臣卿のお言葉をとまはり、大に面目をほどこして引きさがつて來たのである。

で、西郷と坂本は、うちつれて、これから逸見をたづねて、誓願寺へ行くところであつた。

『坂本氏、逸見は失策なぢなかつたかの』

『別に、愉快な男でござる』

『はつ／＼、罪のない男でろう』

『はい／＼、へい、坂本さまでございますか、ようこそ、さアどうぞ』

徳五郎は愛相よく招じ入れるのであつた。

『ほう、徳五郎どの、毎度來て厄介になるの』

『えい、どうつかまつりまして、なんのへい』

『逸見氏は』

『へい、お在宅でございます』

『ちよつと招んで呉れまいか、薩州から、西郷どのまゐられたとな』

『はい／＼、まア、ともかくもおあがりなすつて』

『では、西郷氏、まづ』

『ゆるされ』

ヌツと入つた武士、凄い目が、ギョロリとしてゐる、徳五郎も、さすがに威伏される心地がするほどであつた。

『先生／＼』



十郎太が、大の字なりにふんどりかへつてゐるところへ、徳五郎は、すつと戸を引

きあけると、かういつてよんだ。

十郎太は、ぐるりと臂を立て、

「なんでごわす」

「お客さまどす」

「ほう」

「薩州の西郷さまたらいふ方どす」

「なに西郷」十郎太は、がばと起きると、急いで出て来た。

見ると、西郷、いつにかはらぬ、茫漠としたなかに、一味の温情をたへてゐるのである。

「西郷殿、御健勝でござしたか」十郎太、下手へまはつて挨拶した。

「逸見、あんたも健固で」

「坂本どの御一緒でござしたか」

「西郷氏のあないした」

「それはどうも」

「喜んで呉れ、逸見、宿志を遂げるときが来た、いや、一段に入つたよ」

「やア、それは大慶」

「今日な、おいどん、この坂本氏と、長州の後藤氏とな、三人うちつれて、三條右大臣家へ伺候して畫策のことやらなにやら、天聞へ奏達をたのんだ、上首尾であつたわ」

「御満足でござさう」

「本懐ぢや、なれども、事業は、これからぢや」

「御尤も」

「だがな逸見、薩長土聯合も成立したうへは、もう、大局はきまつたわ」

「お、芽出度うごわす」

十郎太は、坂本の腐心も知つてゐる、快心の笑をもらして、坂本を見た。

「西郷氏の仰せの通りぢや、大局は決したわ、はつ／＼／＼」



西郷と坂本の来るあとを、一人の浪士が、つくともなく、つかぬともなく来たのであつたが、西郷にも坂本にも、とんとそれは氣つかぬことであつた。

で、あとをつけた浪士は、二人の徳五郎の家へ入るのを見ると、につこり笑つて、立ちさつたのである。

それは、新選組の副將といはれた、土方歳三であつた、かれは沈着剛毅の士で、實力からいへば、むしろ近藤以上ともいはれたのである、寡言柔和であるが、一度怒れば、まると、狂瀾怒濤のやうに、なにものをも突き碎かなければやまぬの勇猛さをつんだ男であつた、その土方がつけたのである、しよせんは、なにごとか起らぬではやまぬのである。

土方は、ばらくと、當時、彦根屋敷にゐる近藤のところへ駆けつけたのである。

『近藤』

『どうした土方』

『坂本が、誓願寺の徳五郎のところへ入つたぞ』

『うむそうか』

『それから、大兵肥満の武士が同伴した』

『誰れだ』

『誰れとも知らぬが、たしかに、薩州の西郷吉之助だと思ふ』

『なにッ、西郷ッ』近藤は、勢ひ込んだ。

『たしかに、さうだと見た』

『きやつは薩摩、勤王黨の頭領だ、土方、殺つてしまわう』

『うむ、殺らう』

『あの徳五郎のところには、たしか、逸見とかいふ、西郷の手のもので、強かなやつとか聞いたが』

『うむ、で、西郷が訪ねたのだな、いや、一束にして討ちとるには、てうどいゝわ』

『手剛いやつらだ、土方、充分に注意してやらねばならぬぞ』

『うむ、では、近藤、二十人もあつたらいいだらう』



『よからう』

『おい、井の藤、直ぐと、二十人ほど集めてくれ』

『お、井の藤は、直ぐと立つて、間もなく、隊士の連中を呼び集めて来た。』

『隊長、なにか起りましたか』

『うむ、諸君、今日は腕を振るつてくれ』

『はア』

『薩の西郷、土州の坂本、長州の後藤、目ざすあひてだ、その、西郷と坂本が、いま、誓願寺の徳五郎のところにゐるといふのだ、是非討ちとらねばならぬ、頼むぞ』

『えッ、西郷と坂本、各々、大ものだぞ、働き甲斐があるのう』

『さア、諸君、用意しろ』

『はア』隊士の連中、それぐに、身ごしらへをした、刀の目針をしらべ、羽折の下へたすきをとつた。

前祝ひに灘の鏡をぬいて、飯食茶椀で、二三杯づつ、冷でひっかけ、英氣をつけて

殺氣走つた新選組の一派は、徳五郎の宅を指して進んだ。

\* \* \*

こなたは、そんな恐しい奴らが狙つてゐるとも知らぬ、徳五郎の家の奥の間、酒肴を揃へて、心からもてなす徳五郎の志しに、西郷坂本らは、うちくつるいで、盃をかたむけてゐるところであつた。

はなしは、それから、それへとうつて、十郎太の豪傑ばなし、鴨川べり、仇討ちの一條におよんでゐたのである。

『はつ／＼、ぬしは、やつぱり、元氣な男だ、はつ／＼』

西郷は、十郎太の、四人の新選組の隊士を斬り捨てたはなしをさも心地よさうに、かういつて、から／＼と笑つたのであつた。

『いや、逸見氏、貴公の助力で、柳の仇討ちも出来、拙者よりも御禮申すぞ』

『義を見てなすは勇士のつねでござわすわ』

『それにつけても、近藤一派の暴行には、とんと顰蹙の外ござらぬ、志士の面々、か



れの手は無残な最後を遂ぐるものかざしれず、憎むべきやつでござる』

『ほう、噂にも聞いてゐる、が、しかし、坂本氏、要は、暴漢の暴舉、志士を失ふは残念ながら、かれ、やがては、幕府が、天下の望みを失ふ、あれも、よい道具でござるわ』

『いかさま、それもある、手にたて、失ふほどのことのござらぬが、油断とはならぬこととござる』

『うむ』

坂本は別に、新選一派を恐れるものでもない、けれども、近藤と聞くと反感を持つてゐるのである、けれども、かれは國士、このやうな、猪武者を、ことさらに向ふにまわして争ふ考へもない、たゞ、かれ近藤には、警戒の要があると思つてゐたのであつた。

『旦那方、なにはなくとも、お過しなされてください』

『いや、親分、雑作になつてすまぬのう』

口重もな西郷は、ほつつりと愛嬌をいふのである。

『ほんとに、このごろは、新選組たちの隊士とやらが、無闇矢鱈と暴れますので、しん、物騒でなりませぬ』

『いかにも、あのものどもには困つたものだのう、だが、町家には、案ずることもあるまい』

『へい、それアア、さうですが、なんにせよ、盛り場／＼で、しよつちゆう、刃物沙汰をされるのには、やつぱり人氣を腐らせてしまひますで』

『それもそうだの』

『聞けばア、天朝さまへ忠義のお侍さんたちばかり狙うといふこと、憎いやつらどすなア』

『はつ／＼、憎いやつらだが、無頼の馬鹿ものどもだわ』

『へ、ッ、おほきに』

西郷はまるで新選組のことなんぞ、問題にもしてゐないらしいやうである。



『でも、西郷どの、あの新選組のために、勤王の志氣を沮まれるかと思ふと、捨て置けない心地がします』

『ハ、ハ、ハ、ツ、おぬしは、争つて見たい氣がするのさ』

『ならば近藤、斬つて捨てたい氣もします』

『捨て置いたがよいわ、やがて、自滅のときが来る、幕府があせればあせるほど、自滅の淵へ陥ち込むのだ、逸見、滔々たる天下の大勢は、天ぢや、時ぢや、人の力でどうすることが出来るか、まして、暴漢、近藤一味の狂暴が、なんにならう、けつくは我れときづつくもものだ、勤王の志氣は、そのくらゐのことで沮まれるほど、薄弱のもではないわ、はつ／＼／＼』

『いかにも、西郷氏の所説のとほりぢや、かれら輩の暴行に脅威されて、くぢけるやうな志士はない、かへつて志氣を煽りはするであらう』

『さうぢや／＼、はつ／＼／＼、世は轉換の機熟す、坂本氏、近藤は馬鹿ぢやの、だが、可愛いところのあるやつぢや、はつ／＼』

泰平なのは、西郷の胸宇である、一世を驚倒させる近藤も、西郷の前には、大向うを喜ばせる、道化役者くらゐなものであつた。

『はつ／＼／＼』

坂本も呵々つと笑つた。

\* \* \*

そのとき、どや／＼と、徳五郎の表より踏み込んで来たものがある、それは新選組の一隊であつた。

喧嘩好きな若いものたちも、噂さに憎えて、手の出しやうもなかつたのであつたがさすがは徳五郎、ばら／＼と走り出ると、一隊の行手を塞いで立つた。

『待ちなせい』かういつて手を擴げた。

先きに立つたのは近藤であつた。

『え、退けッ』

『退かぬ、なんだつて、あんたはんたちは、人の宅へ無断で踏み込ましつた』



「駄れ、貴様のところには、西郷と坂本が居るだらう」

「い、や、ゐねえ、が、お侍はん、ゐやうがゐまいが、無断に踏み込むとはなんのことだ、問ふてから踏み込んでいいだらう」

「えい、四の五と吐さずと退け、たしかに二人がゐることをつきとめて来たのだ、退け、退かぬと叩き斬るぞ」

「ほう、一たいあんたはんは誰れだ」

「新選組の近藤勇だわ」

「え、ッ」

さすがに、さうと豫期はしてゐたものゝ、徳五郎、名乗られると、思はずたじくとたじろいた、が、

「それぢや、噂さの高い近藤か」

徳五郎は、きつと覺悟をきめた。

「お、野郎ども、みんな集める、近藤さん、そんな人はゐねえ、かへりなせえ、た

つて踏み込むなら、わしも男だ、通さねえ」

「なにをッ、下郎めが」

近藤は、さつと斬り捨てようとした、とたんに、寅松と権三、ぱつくと、煙草盆をとつて投げつけた。

「えつ、無禮者め」

近藤は身をかはしながら、さつと斬りおろした、危く斬られるところを、徳五郎は身をかへして奥へ逃げ込んだ。

「旦那方、新選組の近藤が踏み込みましたぞ」

かういふところへ、飛び込んで来た近藤は、さつと一刀浴せて、後から、袈裟がけに斬り上げた、あつと叫ぶ間もなく、徳五郎は、ぱたり倒れた。

龍馬は、すかさず、さつと小柄を手裏剣に投げつけた、近藤はひらり避けた、新選の一隊は、ばらくと入口へあつまつた。

近藤も、あひてがあひてなのだから、無茶に飛び込む事は出来なかつた。



『坂本、西郷、近藤勇だ、覺悟しろ』

ぎよろりと、内部をにらんだ近藤は、

『それッ』と一隊へ指揮すると、やにはに、まだ、鐵扇である西郷へさつと斬りつけた、と同時に、土方は坂本へ向つた、逸見へは井の藤、じりりとつけてゐる。

西郷は、ばちん、近藤の一刀を支へた、劍の荒いこと、當時天下第一といはれる近藤の鋭い太刀は、西郷の鐵扇に、ウンと受けとめられたのである。

『馬鹿ッ』

西郷の一喝、雷のごとく響くと、髪がざはくと波を打つた、凄まじい勢ひであるさすがの近藤も、思はず、ぱつと一步さがつた、ところへピュッと鐵扇が眉間へ飛んだ、あつと避けた近藤は、避け損じて、左小鬢をしたゝかに打ちつけられた、が、不敵な剛のもの、屈せず、びたりと太刀をつけて、ぢりりと詰めよつた、そのときには西郷は一刀抜きはなつて、びたりと平青眼にかまへてゐた。

と、一人の隊士は、捨身になつて、さつと西郷へ斬りかけた、やつと、西郷は一足

退いた、退きさま、のめるやつを、えいッと斬り捨てた、とたんに、近藤の激しい太刀が眞向微塵と斬り込んだ、あはや眞二つと思ひの外、西郷はすつと身をかはした。

『えいッ』再び斬り込んで来る、ばちん受けとめられた。

近藤はすつと太刀を引いた、と、ばらりと隊士が三四人、入りかはつて向つた。

近藤は隙を見て斬り仆さうと、西郷の側面へまはつた。

西郷は横戸をぱつと蹶外づして、庭へ出た、近藤もばらり追ひかけて、ふたゝび西郷と太刀をあはせた。

逸見はこのとき勇をふるつて、隊士のなかへ斬り込んで、次の間で奮戦してゐた。

坂本へは、土方と井の藤が、尖刀を並べて、ぢりりと追つてゐた、隊士の死體が四つばかりころがつてゐた、が、土方と井の藤は、是が非でも坂本を討ち取らうといふ意氣込みに充ちてゐるだけ、容易に太刀先きが動かぬのであつた。

一番に花々しいのは、逸見であつた、無茶に斬りかゝる隊士と、火花を散らして戦つてゐた、對手はいま六人ばかりである、胴斬り袈裟がけ、唐竹割、五人ばかり斬つ



たやうすである。

そのうちに、どつと喚いて入り込んで来たのは、徳五郎の乾分若いものたち、四天王が眞つ先きに、鳶口、脇差、槍なんぞを持つて飛び込んだ、なかにも舳綱の文太は六尺餘りの丸太をとつて、飛び込むと、隊士のうしろから、無茶に振りまはした、一人は脆くも肩をはねとばされて、ばたり倒れた、寅松、権三、惣太等は、鳶口をふるつて、打つてかゝつた、隊士たちは、しどろもどろ、忽ち十郎太は、二人ばかり斬り伏せた、残るやつらは、かなはぬと見て、ばらばらと逃げ出した。

「畜生ッ」寅松は、うしろから鳶口をぶーんと肩口へ打ち込んで、ぐんと引くと、よろ／＼とよろけた、若いものたちは、寄つて集つて鳶口をたてた、隊士はうめき叫んで、苦しみがいた。

十郎太は直ぐと、奥へ駆けつけた、土方と井の藤とも一人の浪士をあひてに、坂本さすが苦戦であつた。

「坂本どのしつかり」十郎太は叫びさま、

「ヤッ」と、土方のうしろから、斬りつけた、が、さすがは土方、さつと身をかはして、ばちん受けとめた。

「それ、やつつける」

ばら／＼と鳶口連が躍り込んで来た、これにはさすがに土方も井の藤も驚いた。

と、虚につけ入た龍馬は、

「えいッ」と一聲、一人の浪士を袈裟がけに斬り放つた。

土方も井の藤も、もう失敗と見たので、さすがに近藤の出た横戸へ、たら／＼と退くと、ぱつと庭へ出た、坂本逸見もつゝいて飛び降りた。

そのとき西郷は近藤と、三人の隊士をあひてに戦つてゐた。

鳶の連中は、わアツと喚いて、庭をとりまいた。

こんどは新選組がわなに落ちた形ちである、が、さすがに剛のものたち、騒がずに戦つてゐる、が、油断なく、いまは逃げみちを考へてゐるのであつた。

西郷が近藤の太刀のくづれを見て、ヤツと一聲斬り込むと、近藤は、ぱつと横へと



んだ、ばら／＼と飛ぶと見る間に、ぱつと、六尺の扉へ躍りあがつた、西郷は、すつと走つて、すかさず、さつと足を拂ふと、近藤はぼんと、とんぼがへりをして扉外へ消えた。

『はつ／＼／＼』

西郷は、から／＼と笑つた、さすがに近藤は豪いと感心したのである。

土方と井の藤も、いまは血路を開いて逃げ出るの外ないのである、新選一味は、さんと坐敷へ駆けあがつた、すると鳶の連中、急に元氣づいて、わつとわめいて、どつと後を追つた、十郎太は追つがけて土方を斬らうと追ひすがつたが、鳶の連中が邪魔になるので、どうすることも出来なかつた。

隊士たちの鋭い切つさは、忽ち鳶の連中を切り抜けて、た／＼と、表へ飛び出したが、表にも、半鐘の音に駆けあつまつて来た、鳶のものたちがゐた。

『それ、悪漢だ、とつちめる』わつといふと、梯子をとつてどつと行きてを塞いだ。  
『えい、邪魔すな』

隊士たちはぱつと梯子をはねのける、が、またもや、ぱつとかぶせて来る。

四天王のものは、親分の仇敵といふので、勢ひ込んで打つてかゝる、なかにも文太は例の強力で、丸太をふつて、隊士の一人を脳天碎いて打ちたほした。

土方井の藤は奮戦して落ちのびた、が、隊士の一人は、不運にも、梯子に箝つてたちまち鳶口にかゝつて、無残に倒れたのである。

このとき、新選組の斬られたものは、十七人、徳五郎の方では、徳五郎の外、白狐の惣太は、土方の刃にかゝつた、外に五人ほどあつた、怪我人は大分とあつた。

西郷と坂本逸見は、この無残の犠牲者を見まはつて、黯然として涙をのんだ。

『坂本氏、これも、時代の犠牲者だのう』

『敵といへ、味方とよぶも、時代がさせるのだ、果敢ない人生でござるのう』

坂本と西郷は、相かへり見て、歎聲をもらした。

『やがてまた、一大犠牲を求むる時が来なければなりません』

逸見も、さすが、徳五郎、白狐たちの死を見ると、感然として、やがてくる、血の



洗禮の要求する、無残な、時代の轉換がつくる醒旋風に思ひいたつたのである。

『さうぢや、それも是非ない』三士は蕭然として、死者をかへり見た。

『みんなの衆、不惑ぢやのう』

親分、兄分、友を討たれた、鳶のものに、西郷は、眼をしばたゝいていつた。

『身共等の寸志、死者の靈へ手向けてもらひたい』

坂本は、一包みの黄金を、寅松に渡した。

『みんな、運命ごとや』

かういつて、坂本の包みを受けとつた寅松は、さすがにたらくと涙がながれた。

『頑迷な幕吏ばら、掛りあふも迷忌、寅松、あとは頼む、西郷氏、逸見氏も、ともか

くも、立ち退くことにいたさう』

『おゝ』

『あつ、さうだ、でなくてさえ、坂本さまをつけ狙つてゐる役人たち、早く、立ちの

いておくんなはれ』

『おゝ、たのむ』三人は、愁然として立ちさつた。

\* \* \*

ところへ、乗り込んで来た一隊は、奉行代理、大瀧惣右衛門、ぱつと馬から飛びお

りて、

『これく、狼籍ものはいかゞいたした』寅松は代表者となつて出た。

『へい、御苦勞さまで、へい、みな逃げてしまひましてございます』

『ふむ、さうか、なにものかわからぬか』

『なんでも、此頃、噂の高い、新選組の近藤勇とかいふもので』

『黙れ、近藤が町家などへ狼籍に及ぶか、たわけめ』

『へいッ』

『死傷は、どうぢや』

『へいつ、師匠でおすか、長唄、清元』

寅松、とんとかてんがゆかぬのである。



「馬鹿ッ、死人、怪我人はどうぢやといふのだ」

「へい、なるほど」

「たわけめ」惣右衛門は、ずっと現場を臨検した。

あたり一面の血潮、凄惨をきはめてゐる。

「うーむ、やつたな、早野、あらためて見る」

「はッ」同心の早野は死者を調べて見ると、浪人ものが十七人、鳶のものが六人、惣右衛門も早野も小首をひねつた。

「これく、いつたい、この浪人ものは、なにものが斬つたのぢや」

「へい、わし等が斬りましたので」

「いつはりを申すな、貴様等に、このやうな働きが出来るか、ありていにはぬと、ためにならぬぞ」

「へッ」

「へいではない、貴様たちの殺したのは、鳶のあと、打碎いたものなぞであらう」

「へッ」

「なにものが斬つたのぢや」

寅松も、ぐつとつまつた、が、實をいへば、新選組が、暴れ込んだのだ、罪は當然

近藤勇一味にあるのだ」

「へい、實ア、わし等とこにゐた劍術の先生が斬りなすつたので」

「ふむ、なんといふものだ」

「逸見十郎太さま」

「どこ藩のものだ」

「浪人で」

「不埒なやつだ」

「へい、お役人さま、でも、近藤勇一隊のお武家は、無断と踏み込んで、眞つさまに親分を斬りましたので」

「いつたい、そのやうな浪人ものを置くのがわるいのぢや」



「何故、半鐘など打つたのぢや」

「へい、二十人も三十人も、抜き身で踏み込まれては、親方の一大事、つひ半鐘を打つたやうなわけ」

「貴様が打つたのか」

「いゝえ、わしぢやおまへん」

「誰れぢや」

「へい、わしや」

「どうして打つた」

「へい、なんだか知りませんが、火事やいふから、打ちました」

「不都合なやつだ、きつと叱りおく」

いはゞ正當防衛、罪と見ることは出来ない、そして、火事と思つて半鐘をうつた、それもどうして見やうもないことであつた。

「その方でもで、取り片付けい」

「はつ、かしこまりました」

大瀧惣右衛門、一通りの取り調べだけで、馬に乗つて引きかへした。

### 最後の龍馬

美人薄命に泣くは、情史に點綴さるゝ、悲艶の挿話であるが、古來、英傑の士、間凶刃に仆る、これ一對の哀情、我等が奥祕の琴線を撃つて、もつて飛魄の妙曲となる、實に人生は迷蒙衆愚の世なるかな。

一代の傑物、坂本龍馬は、ますく新選組一派の反感を買つたのである。

龍馬の暗中飛躍は、着々として、皇基復興の畫策をすゝめられてある、天下の形成は、日一日と、幕府に非にして、勤王の風は、滔々として、時代を風靡する勢がある、佐幕一味の焦燥も、また無理からぬことである。

「土方、残念だつたな」



近藤は腕をさすつて、龍馬等、斬滅の失敗を口惜しがるのである。

『うむ』土方も憮然としてゐる。

『網に入つた、二頭の大魚を、むざと逃がした、近頃の失敗ぢやの』

『うむ、もう一氣といふところまでやつてのけたがなア』

『味方は、ほとんど全滅、敵の首一つあげ得ないとは、頼りない』

『さうぢや、新選組の估券もおちた』

『うむ、残念ぢや』

『近藤』

『うゝ』

『是が非でも、かれ坂本、斬らんぢや置けぬのう』

『さうだ』

『あいつを斬つて、我等一隊の存在を見せつけてやらにやならぬわ』

『斬らんぢや置かぬ』

『うむ』

『諸藩と、公卿方を結びつけて、幕府の命運を危くするやつは、あいつだ、糞ッ、土方、きつと、坂本を斬らう』

『うむ、我々がにらんだからには、遅かれ早かれ、討たんぢや置かぬのだ』

『うむ』

ところへ、ヌツと入つて来たのは、久保光之進。

『隊長』

『おゝ、久保か』

『どうだ、坂本の話は』

『きやつ、長州へ密行するげ』

『長州へ、うゝ』

『近藤、何等か畫策に行くのぢやないかな』

『土方、殺つてしまはう』



『どうして』

『場所撰ばず』

『そりや、亂暴だな』

『なにが亂暴だ』

『だつて近藤、充分に用意してかゝつてさへ失敗するのにならぬをいつちやだめだよ』  
『いゝや、なまじか、用意があるからいけないのだ、金城鐵壁もくたくで、やつつける』

土方は、はたとひざをうつた。

『うむ、よし、やろう』

『うむ』 猛虎の意氣は鐵のごとくひきしまつた。

\*

\*

\*

\*

で、新選組は、たえず坂本の動靜をさぐらせてゐた。  
すると、ある日の夕刻、井の藤はまつしぐらに新選組の本據へ駈け込んだ。

『近藤』

『おゝ』

『坂本が、土州屋敷の直ぐ前の、料亭にゐるぞ』

『そうか、よし、土方』

『おゝ』

『殺らう』

『殺らう』

『井の藤』

『おゝ』

『龍馬一人か、それとも』

『中岡、逸見の二人ゐる』

『よし』 近藤は、わきにあつた貧乏徳利をとると『えい』と一聲、庭の置き石へ、はつしと投げつけた、徳利は、すさまじい音をたて、砕けとんだ。



『みんな、仕度をしろ』

『お』

かねて、坂本斬り捨ての手として選ばれた、腕に覚えの連中、十人ばかり、嚴重に身仕度をした。

時刻は暮れ六つ過ぎ、闇にかゝつて、進むにはてうどよい。

新選組の隊士は、勇氣凛々しく繰り出して行つた。

\* \* \* \* \*

その日は、龍馬、ふと、お柳に會ひたい心になつて、ふら／＼と、龍巻の宅を訪づれた、お柳は、このごろ龍馬の身の上を思ふと、薄氷の上を踏んでゐるやうな思ひである、ほんとは、いまがいともしはれぬ命のやうな心地がするのである、だから、會うから會うまでは、心の安せぬ思ひであるのであつた。

その龍馬が訪づれた、お柳は飛びたつやうに喜んだ、龍馬とても木石でない、若い血は漲つてゐる、二人は喃々のかたらひ、譯もないことに、つひ、日の暮るゝ近くま

で遊んだのであつた、が、龍馬はその日は中岡悌次郎と、會談の約束がある、暮れ六つには出會はなければならぬのである。

『お柳、身共、今日、六つに、中岡と會うことになつてゐる、行かねばならぬ』

『でも、あんた、今日は泊つて行きなはれ』

『いや、さうしてはゐられない、約束してあるから』

『でも、あたし、急に胸さはぎがして來ましたもの』

『ハ、ツ、馬鹿な』

かういつて龍馬が、から／＼と笑つた、そのとき、わきの茶だんすのうへ／＼かざられた、一輪いけに生けられた水仙の花が、ぼとりと落ちた。

『あらツ』

お柳は忌はしいものを見るやうに、かほをくもらせて、落ちた水仙をつまみあげた。『行かう』龍馬は、つとたつた。

『でもなア、あんたはん、あたし、きが、りだによつてな、泊つておくんはれえな』



「はつく、くだらぬ心配するにや及ばぬわ」

「でも、今朝生けたばかりの水仙の花がおちる、忌はしいことでもないかいな」

「つまらぬことを、散る筈で散る、なんの不思議もあるものか、そうぢや、散る筈で散る、三百年の徳川の流れの涸れるも、時ぢや、さかりには、どのやうなことがあつてもどうか無事で行く、だが、時、散る筈のときが来れば、散る、ハ、ツ、散る筈で散る、ときぢや、幕府はたおれ、九重の光りは輝く、時ぢや、筈ぢや、はつはつく、お柳、心配することはない、な、たとへ、どのやうな曲者が、この龍馬をつけ狙つても、のがれる命は、きつとのがれる、はつく、つまらぬ苦なぞせぬがよいわ」龍馬はこともなげに打ち笑つた。

「でもなア」

「ハ、ツ、まだそのやうなこと、また近くに來やう、今日は是非の會談ぢやだでな」

龍馬はかういつて出たもの、その日にかぎつて、妙にお柳がなつかしい心地がした龍馬は思はずお柳の顔を見ると、お柳は淋しく笑つた、が、なんとなうお柳がたよ

りなさそらなやうすを見ると、龍馬もなぜか淋しい氣がした。

料亭へは中岡と逸見が來てゐた、約束の時間がもう小半刻も遅れてゐたので、中岡は待ち焦れてゐた。

「中岡氏、待ち遠うでござつたのう」

「いや、このごろは、新選一派のものども、貴公を、ひた狙ひといふ噂さに、案じ申したわ」

「ハ、ハ、ツ」

龍馬は、こともなく笑つたが、お柳の言葉に、ふと、合された中岡の言葉に、さすがに、さつと忌な氣がした。

「秋の日は鬱陶しいのう」龍馬は手欄を越して、見るともなく屋外を見た。

「うむ」中岡は氣のない返事をした。

「坂本どの」中岡は急にあらたまつた調子で呼びかけた。



龍馬は、やつと我にかへつたやうに、身をあらためた。

『中岡氏、して、後藤氏の首尾は』

『大成功にござるぞ』

『お、坂本は思はず膝を乗り出した。』

『成功とか』満面に、喜びの色がさつとのぼつた。

『後藤氏の舌頭、火と燃えて、大義は炳然、慶喜公きつと大政奉還と御覺悟の由』

『お、我等の腐心もむくはれたか、中岡ッ』

『坂本氏』

感きはまつて、二人は、はらくと嬉し涙に咽んだ。

『坂本どの、お芽出度うごわす』

逸見も感激の涙を流したのである。

『お、逸見氏、世は萬歳ぢや、天神、皇祖の御靈、いまこそ日本の國土を照々として

らさう、祥瑞ぢや、吉慶、なんかこれに過ぎよう』

國士の面上、暗影は見る／＼晴れて、麗かな笑ひが、莞爾として交はされた。

近藤一派の新選組は、料亭の暖簾をぱつと拂うと、凄い目が、どや／＼と立つた。

家内のものたち、女中、若いものたちは、みなもう、ぶる／＼とすくまつた。

『坂本龍馬はどこにゐる』

と、一人の若いものが、ばた／＼と梯子段を駆けあがらうとした。

かれは、日頃坂本の恩顧になつた男なので、急をつくるつもりであつたのである。

『えいッ』

それと見て近藤は、やにはに細腰さつと斬つて放した、どた／＼と二つになつたひくろが、階段をころがり落ちた。

『聲を立てると、塵殺にするぞ』

近藤、土方、井の藤なんぞ、す／＼と、音もたてずに、階上へ登りあがつた。

かれ等は廊下で拔身を提げながら、坂本の在所を考へた。



と、いま、多年の宿志をむくいられた坂本は、もう嬉しさに、すべてを囚らはれてゐたのである。

中岡、逸見とてもそのとほり、同志の本懐の實現されるのだ、これほどの喜びがあるものではない。

たいもう、坐中は、いましも春もたけなは、咲き競ふ、花の香に、陶醉といったときである。

無残、一陣の狂風は、轟然として吹き入つたのである。

入り口の戸は、さつと引きあげられた、ぱつと躍り込んだ怪漢は、屏風を越して、はつと撞ぐる龍馬の面上へ、さつと一刀を浴せて來た。

龍馬は、はつと身をかはしたが遅かつた、肩先き深く切り込まれた。

『うーむ、兇徒め、龍馬を仆すか』

いひながら、龍馬は、脇差に手をかけた、そのとき近藤は、二の太刀をふるつて、眞向を斬りつけた、さすがの龍馬も、ばたりたほれた。

『曲者ッ』

中岡と逸見は、さつとわかれて身構えた。

『あはつ〜、巧くいつた、それ、こいつらも討ちとれ』

『お、』隊士たちは、びた〜と太刀をつけた。

中岡逸見は、坂本を討たれたので、怒りは心頭に燃えあがつた。

『えいッ、狂暴無残な近藤、一代の國士を仆したな、覺悟しろ』

逸見は奮然として、強刀を振つた、隊士たちは、さつと開いて、ちり〜とさがつて、廊下と坐敷へ、弓なりにかまへた。

中岡は、土方と井の藤の、鋭い切つ先きに、押しつけられて、形勢危くなつたとき中岡は禪身の勇を鼓して、さつと、敵のなかへ突き入つた、そのとき、近藤は上手の方立つて、笑つてゐた。

『おのれ』

死に身になつた中岡は、飛鳥のやうに、隊士たちの劍を拂ふと、ぱつと近藤へ斬り